

中能登町

瀬戸窯跡群・瀬戸遺跡発掘調査報告書

2009

石川県教育委員会
(財)石川県埋蔵文化財センター

瀬戸窯跡群・瀬戸遺跡発掘調査報告書

2009

石川県教育委員会
(財)石川県埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本書は瀬戸窯跡群・瀬戸遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は石川県鹿島郡中能登町瀬戸地内である。
- 3 調査原因は緊急地方道路整備事業主要地方道志賀田鶴浜線であり、同事業を所管する県土木部道路建設課（七尾土木事務所）が石川県立埋蔵文化財センターに発掘調査を依頼したものである。
- 4 現地調査は石川県立埋蔵文化財センターが依頼を受けて平成元（1991）・同2（1992）年度に実施した。報告書にかかる執筆は刊行は財団法人石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて平成19（2007）年度に実施し、報告書の刊行は平成20（2008）年度におこなった。
- 5 調査に係る費用は県土木部道路建設課が負担した。
- 6 現地調査は平成3年度に実施した。面積・期間・担当課・担当者は下記のとおりである。

現地調査期間 平成元年8月7日～11月17日
平成2年8月29日～10月31日

調査面積 4,100㎡（元年度2,600㎡、2年度1,500㎡）

担当課 調査第一課

担当者 主事 伊藤雅文
- 7 資料整理は調査部調査第4課が担当し、発掘調査報告書の刊行は調査部県関係調査グループがおこなった。
- 8 本書の執筆・編集は伊藤雅文（調査部県関係調査グループリーダー）がおこなった。
- 9 発掘調査には下記の個人、機関の協力を得た。

県土木部道路建設課、七尾土木事務所（現中能登土木総合事務所）、鳥屋町（現中能登町）教育委員会、池田拓、干場道治、田畑弘、宮下栄仁
- 10 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 11 本書についての凡例は下記のとおりである。
 - 1 方位は座標北である
 - 2 水平基準は海拔高であり、T.P（東京湾平均海面標高）による
 - 3 出土遺物番号は挿図と写真で対応する

目 次

第1章 経緯	1
第1節 発掘調査の経緯	1
第2節 整理作業等の経緯	4
第2章 遺跡の位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 遺構と遺物	9
第1節 調査の概要	9
第2節 構造物	15
第3節 土坑	20
第4節 溝	24
第5節 その他の遺構	26
第6節 出土遺物	26
第4章 総括	44

挿図目次

第1図	瀬戸窯跡群位置図	1	第14図	土坑実測図(2) (S=1/40)	24
第2図	調査区的位置図	3	第15図	第2次調査溝実測図 (S=1/300・1/40)	25
第3図	古代須恵器窯跡の分布	6	第16図	ピット実測図(1) (S=1/40)	27
第4図	第2調査区実測図 (S=1/200)	10	第17図	ピット実測図(2) (S=1/40)	28
第5図	遺構平面図 (S=1/200)	11	第18図	出土土器(1)	30
第6図	遺構平面図 (S=1/200)	12	第19図	出土土器(2)	31
第7図	遺構平面図 (S=1/200)	13	第20図	出土土器(3)	32
第8図	遺構平面図 (S=1/200)	14	第21図	出土土器(4)	33
第9図	SB01・SD01実測図 (S=1/80・40)	17	第22図	出土土器(5)	34
第10図	SB02実測図 (S=1/80)・SX104・SK12・ 20実測図 (S=1/40)	18	第23図	出土土器(6)	35
第11図	SB03実測図 (S=1/80)・ SK15・21・22・101実測図 (S=1/40)	19	第24図	出土土器(7)	36
第12図	SB04・SD05・SK18実測図 (S=1/80・40)	22	第25図	出土土器製品・石器等	36
第13図	土坑実測図(1) (S=1/40)	23	第26図	調査区検出遺構概念図	45

表目次

第1表	須恵器窯跡地名表	7	第2表	出土遺物観察表	37
-----	----------	---	-----	---------	----

図版目次

図版1	航空写真	図版15	ピット1/ピット3/ピット5/ピット8 /ピット9/ピット13
図版2	航空写真	図版16	ピット17/ピット18/ピット19/ピット20 /ピット22・23/ピット20/ピット31
図版3	航空写真	図版17	ピット43・53/ピット46/ピット50/ピット 51/ピット71/ピット114/ピット108・ 109/ピット76
図版4	航空写真	図版18	出土遺物(1)
図版5	航空写真/第2調査区	図版19	出土遺物(2)
図版6	遺構集中部分	図版20	出土遺物(3)
図版7	遺構集中部分	図版21	出土遺物(4)
図版8	谷への傾斜/落込101	図版22	出土遺物(5)
図版9	落込101/谷への傾斜	図版23	出土遺物(6)
図版10	SK27とSD01/SK27断面	図版24	出土遺物(7)
図版11	SK27遺物出土状況		
図版12	SK02/SK04・17/SK17		
図版13	SK17断面/SK20/SK26・ピット74		
図版14	SK11/SK12/SK07		

第1章 経緯

第1節 発掘調査の経緯



第1図 瀬戸窯跡群位置図

発掘調査は、主要地方道志賀田鶴浜線緊急地方道路整備工事に伴うものである。この道路は能登有料道路上棚インターチェンジから和倉温泉や能登島へのアクセスをよくする目的で計画された。昭和57年11月に石川県立埋蔵文化財センター企画調整課によって試掘調査および踏査がおこなわれた。工事計画は、周知の遺跡である町指定史跡瀬戸窯跡群の西半分のエリアを縦断して瀬戸8号窯にかかる状況であった。試掘調査によって遺構遺物の検出を見ことから発掘調査をおこなうこととなったものの、瀬戸窯跡群にかかることから道路の設計変更の必要もまた協議されたのである。

平成元年度に第1次調査として、道路敷部分の調査を瀬戸窯跡群として調査をおこなった。このときの調査範囲は、町指定史跡瀬戸窯跡群を保護する道路線形ではなかったが、瀬戸8号窯付近に立てられた埋蔵文化財包蔵地標柱帯を避けた範囲で調査することになった。調査の結果、指定された窯体本体あるいは灰原がかからず、区画溝や柱穴・土坑を検出し、集落のような景観として窯跡群にともなう作業場の性格を推測した。さらに、これらの遺構が西に伸びていることも明らかとなった。調査した地点は、水田と山に接する部分にあたり、これら遺構群が窯跡で生産された土器を搬出する場所としての可能性も想定した。そうすれば、眼前に流れる伊久留川を利用する搬出手段が想定されるために、工事掘削される山際から一部水田にかかる部分までの調査が必要となったのである。

以上より、平成元年の第1次調査は道路本線部分の調査、平成2年の第2次調査は後者の調査目的をもって本線に取り付け農道部分の調査となった。

各年度の調査体制は以下の通りである。

平成元年度（第1次調査）

所 長 橋本澄夫

次 長 柴田 等

調査第1課長 平田天秋

担 当 伊藤雅文（主事-当時）

平成2年度（第2次調査）

所 長 橋本澄夫

次 長 大西外英雄

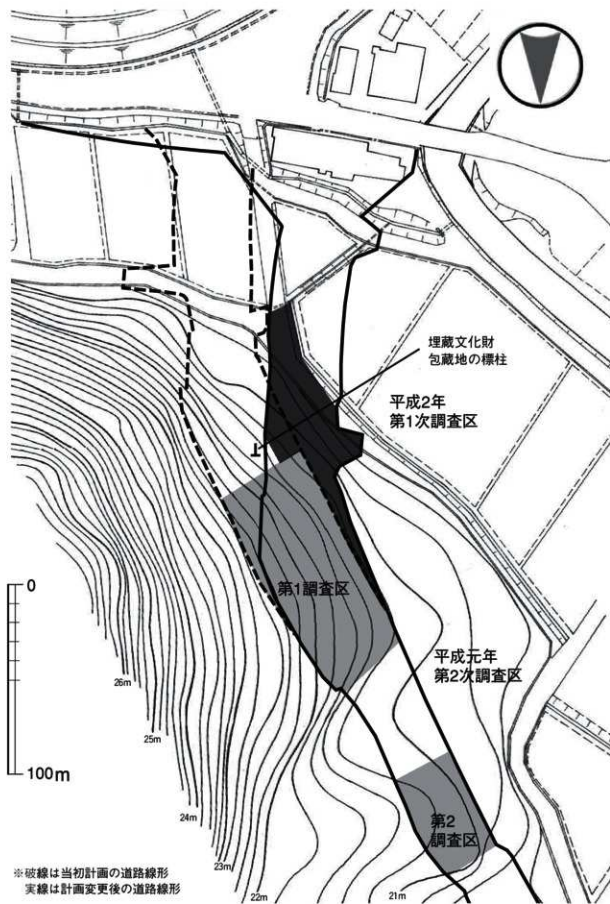
調査第1課長 平田天秋

担 当 伊藤雅文（主事-当時）

第1次調査は、文化財保護法57条の1に基づく発掘通知が平成元年7月19日付で提出され、同時に発掘調査依頼もまた七尾土木事務所から提出された。調査面積は2600㎡である。担当者の伊藤は、志賀町北吉田ノノメ古墳群調査終了後、直ちに瀬戸窯跡群を着手する計画であった。北吉田ノノメ古墳群の調査が7月17日に終了したので、良いタイミングであった。文化財保護法98条2の発掘調査報告を7月25日付で文化庁に提出し、現地調査には8月1日からかかった。立木等の伐採や支障物の撤去は事前に土木側で実施され、表土除去を8月7日からおこなった。

作業員の募集を瀬戸地区・伊久留地区でおこなったが、思うように集まらず、しかも女性ばかりで男性は僅かに2名のみであった。これで2600㎡の調査がこなせることができるか不安であったが、遺構の分布が局所的であったことや、男性が楽できるような働き者の女性” という意味の能登の「とと楽」という言葉が示すように、ベルコンの移動や掘削作業に対する担当者の不安が調査の進行にともなって消えていった。とはいえ、重機による表土除去は可能な限り遺構面まで下げるようにした。調査は、11月17日に終了した。

第2次調査は、文化財保護法57条の1に基づく発掘通知が平成2年8月9日付けで提出され、同時に発掘調査依頼もまた七尾土木事務所から提出された。これを受けて石川県立埋蔵文化財センターが積算を行い、8月21日付理文第143号で返答した。文化財保護法98条2の発掘調査報告を文化庁に提出し、現地調査には8月27日に入った。表土除去を8月29日からおこない、10月31日に終了した。今次の調査は、昨年度調査区の西を拡張するような区域であったことや、そこが遺構の密集する一帯にあたり昨年調査終了部分も含めて精査する必要があったことから、1500㎡という面積を調査した。



第2図 調査区の位置図

第2節 整理作業等の経緯

遺物の洗浄は平成2年度に両年度出土分をおこない、平成3年度に実測・トレースまでを社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託しておこなった。整理体制は、以下の通りである。

理事長 浜岡賢太郎

事務長 太田政雄

課長 田嶋明人

担当 尾田裕子（班長）、新谷由子、小林直子、尾崎昌美

遺物の実測・トレース等の整理作業は順調に進み、平成4年2月3日から3月30日に実施された。

遺物整理が終わってから15年以上におよんだが、平成19年度に報告書のために原稿執筆をおこなった。しかし、担当者の伊藤の記憶もうすれてしまい、土層の意味や遺構の性格についてあれこれ考えたことの記憶も定かでなかったため、インターバルとなった期間の長さを実感している。したがって、報告書作成作業はできるだけデジタル化しておこなうことで作業の効率化をはかると同時に、自らの記憶を呼び起こす作業にしたのである。

平成20年度は、デジタルデータを再編集して、印刷・刊行をおこなった。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

瀬戸窯跡群は、鹿島郡中能登町瀬戸地内に所在する。七尾湾岸に位置する七尾市の南に位置する中能登町は、能登半島基部を南西から北東に抜ける邑知低地帯の北側にあたる。低地帯南北には眉丈山と石動山が連なり、眉丈山麓が北に伸びて低丘陵になる。さらに北から七尾湾に向かって河川が織りなす谷地形によって平地が分断されている。瀬戸窯跡群が位置する地区は、伊久留川が眉丈山北側から流れ出す河谷にあたり、低丘陵ながら奥深い谷となって、意外と山深い印象となっている。

現在、伊久留川が流れる平地には水田が作られており、安定した地盤のように見えるものの、主だった家屋が山際に並ぶように建てられていることから、居住に適さない地であると思われる。調査地付近の水田標高が16～17m、河口付近との比高が意外に少ないという特徴がある。これは、川が流れる速い様子ではなくむしろ水が淀んだ状態に近いと推測され、想像すれば谷全体が沼沢地のような水路の帯となっていたと考えられるのである。このような地形の特徴は、邑知低地帯から続く平野とは大きく異なる。と同時に、この地形の特徴が水田という生産区域を提供するのみならず交通手段としての機能もまた想定される。

昭和30年刊行の鳥屋町史¹¹⁾によれば、「河谷が比較的近い時代まで水面下にあった」あるいは「沼田が一部存在するので現今でもかんじきをはいて水田作業をおこなっている」という記述にも、この地形の特徴をよく示している。したがって、瀬戸の集落は低地帯にある春木地区や末坂地区とのつながりよりも、南北の花見月地区あるいは西下地区とのつながりの方が重要であったことだろう。

さて中能登町は、平成17年（2005）3月1日に鳥屋町と鹿西町と鹿島町との合併により誕生し、人口19762人の町となった（平成21年2月1日現在：町役場ホームページより）。現在の主たる産業は、織物となっているが、農業への依存も大きい。旧鹿西町には能登上布の伝統工芸が保存されていることから、産業の近代化が課題となっている。

これは中能登町のみ課題ではなく、七尾市をはじめとする能登各地の構造的問題でもある。現在の高速道路による物流網からやや外れているためか、工業団地の造成がないことからくるハイテク産業が低調で、奥能登地域の比ではないが人口減少に歯止めがかからないのである。産業の隆盛・工場誘致が必ずしも過疎の有効な対策となりえないものの、地域の活性化の有効な方策として能越自動車道開通が期待されているのである。

第2節 歴史的環境

前節で指摘したように、遺跡が立地する環境が、邑知低地帯の平野部と大きく異なっている。この地域の特徴的な遺跡の消長を見ることで、歴史的特性を考えたい。キーとなるのは、①大きな集落の形成がみられず、②生産にかかる遺跡が顕著であることだろう。

明確な人間活動は、縄文時代前期の瀬戸黍谷遺跡に認められる。邑知低地帯の面する春木から瀬戸に抜ける県道沿いの谷に面する低丘陵上にあり、県道拡幅工事に伴って平成4年の鳥屋町教育委員会が発掘調査をおこなった。明確な住居等の確認はなく、土坑などの小規模な遺構を確認したのみであった¹²⁾。もっとも、小面積であったので、丘陵頂部に集落が展開して谷の水場でなどを潤したり生活



第3図 古代瀬恵器家跡の分布

第1表 須恵器窯跡地名表

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	備考
32021	深沢窯跡群	中能登町一青	古墳	6基確認、町指定史跡
32027	末坂1・2号窯跡	中能登町末坂	平安	町指定史跡
32028	末坂3・4号窯跡	中能登町末坂	平安	
32030	末坂A窯跡群	中能登町末坂	平安	3基以上
32031	末坂B遺跡	中能登町末坂	奈良・平安	窯跡の可能性あり
32032	末坂C窯跡群	中能登町末坂	平安	3基以上
32033	末坂D窯跡群	中能登町末坂	平安	
32034	末坂E窯跡群	中能登町末坂	奈良	
32036	春木1・2・3号窯跡	中能登町春木	奈良・平安	町指定史跡
32037	春木4号窯跡	中能登町春木	平安	
32038	春木5号窯跡	中能登町春木	奈良	一部損壊
32039	春木7・8号窯跡	中能登町春木	奈良	
32040	三池B遺跡	中能登町春木	不詳	
32041	春木C遺跡	中能登町春木	奈良・平安	窯跡の可能性あり
32042	春木F遺跡	中能登町春木	不詳	窯跡の可能性あり
32043	春木G遺跡	中能登町春木	不詳	窯跡の可能性あり
32044	春木H遺跡	中能登町春木	不詳	窯跡の可能性あり
32045	委谷A窯跡群	中能登町春木	古墳・奈良	3基以上
32046	委谷C窯跡群	中能登町春木	奈良	5基以上
32047	委谷D窯跡群	中能登町春木	奈良	3基以上
32060	花見月窯跡群	中能登町花見月	平安	7基確認
32064	瀬戸大門山遺跡	中能登町瀬戸	奈良・平安	窯跡あり
32070	瀬戸窯跡群	中能登町瀬戸	奈良・平安	11基確認、町指定史跡
32072	春木E窯跡群	中能登町春木	奈良・平安	
32074	瀬戸B遺跡	中能登町瀬戸	奈良・平安	窯跡の可能性あり
32076	瀬戸D遺跡	中能登町瀬戸	奈良・平安	窯跡の可能性あり
32078	若狭見窯跡	中能登町若狭見	平安	
32079	春木委谷B窯跡群	中能登町春木	平安	3基以上

の本拠をおいたものであろう。そして、大規模な集落の規模でないことは、丘陵中にあることから容易に推察されるところである。

弥生時代の遺跡が不明確で、基本的に人の居住はない。より下流域にあたる垣吉地区に多数の弥生時代墳墓や古墳時代の古墳が作られたことや、七尾市吉田地区の経塚山墳墓などから、人間活動は伊久留川が二ノ宮川と合流した地点から下流に安定している。具体的な遺跡の存在はわからないが、将来見つかると思われる。

弥生時代や古墳時代は、二ノ宮川流域に大槻古墳群や末坂古墳群、温井古墳群あるいは川田古墳群など、小規模な墳墓が弥生時代終末ごろから古墳時代後期にかけて営まれている。その多くの内容が不明なので歴史展開をあつげたい。もっとも大規模な古墳は川田ソウ山1号墳の前方後方墳（全長55m）を筆頭に、大槻1号墳に27mの前方後方墳などがある程度で、大規模な古墳が継続されない。それとともに、圧倒的多数の古墳が、10m前後の墳丘規模しかもっていないのである。

古墳からしめされる社会の様態は、突出した首長の出現を示すのではなく、小規模な集団が多数存立する状況と示していよう。このような小規模な古墳の集合は、眉丈山麓の古墳群から北方向に連続して作られ、しかもさらに北側の平野に面する低丘陵に作られている状況である。小規模な集団による墳墓の集合と理解すべきであろう。

この中で二ノ宮川が織り成す低地部には川田ソウ山1号墳が作られ、大池周囲の丘陵に100基を超える古墳が作られているのは注目されよう。これら小古墳の築造時期もまた、他の古墳群と同様に明確にしたいものの、川田ソウ山1号墳周辺から5世紀末ごろの須恵器が採集されていることを重

視すれば、古墳時代前期後半の川田ソウ山1号墳以降連続と古墳築造が継続されていることは確実である。

そして、幅500m、長さ3～4kmの細長い低地に作られた合計200基を越すであろう古墳を作った集落をこの地に求めるのは、あまりにも狭い。水田農耕のみを主たる生業とする集落形態とは思えず、東三階A遺跡で碧玉製腕輪未製品が出土していることから、古墳時代においては特殊な生産あるいは能登の物流にかかわる行動など、さまざまな要素を考察すべきであろう。小規模な古墳の集合体ながら、能登の中で首長墳を築かないことからくる注目されない地域ではなく、実態はむしろその逆ではないだろうか。

瀬戸窯跡群が面する低地には基本的に遺跡がない。奈良時代から平安時代にかけて、このような非居住空間に多数の窯跡群が作られた。これらを総称して鳥屋窯跡群と呼ばれているが、5km北に単独的に作られた池崎窯もまた含めた群として把握すべきであろう。それは、本調査によって瓦塔が出土していることから、池崎窯跡と類似する製品を作っているものであり、その親縁性を認めるべきであろう。

鳥屋窯跡群は、春木から瀬戸にぬける県道が、伊久留川と二ノ宮川に挟まれた北に延びる低丘陵を横断しており、最も標高の低い部分につくられている。縄文時代の黍谷遺跡もここに営まれ、山の資源を容易に得ることのできる地なのである。しかし、この窯跡群の集中は、単に山資源の要因ではなく、むしろ窯場の地質の関係あるいは粘土採掘の関係、そして製品搬出の関係などさまざまな要因が考えられよう。

鳥屋窯跡群の最も古い窯は6世紀を前後する深沢窯跡で、6世紀代は不明確ながら断続的にでも続く須恵器生産をおこなうことのできる要因が、窯場に適している条件といえるだろう。つまり上述の条件を兼ね備えているということが、この窯跡群を成り立たせる歴史的特性をもっていたと考えられるのである。

その生産を担った作業場の遺跡はいまだよくわかっていない。春木の緩斜面にある春木窯跡群周辺にあるのであろうか。具体的な遺跡の発掘例はないが、地形的観察から、この付近に存在したと考えられる。瀬戸から花見月にかけても多くの窯跡群があるが、具体的な作業場の遺構の検出はない。春木から丘陵を越えて焼成するために運び込むとは考えにくいので、山すそに接して特別に作業場を設営していたことであろう。作業形態の研究は、これからの課題である。

註

- 1 鳥屋町「鳥屋町史」1955年
- 2 鳥屋町教育委員会「春木縄文遺跡・春木黍谷遺跡」1995年

第3章 遺構と遺物

第1節 調査の概要

発掘調査は、本線部分の平成元年度調査（第1次調査）と、取付け農道部分の平成2年度調査（第2次調査）がある。平成元年度調査には、小さな谷を挟んで南を第1調査区、北を第2調査区とした。第2調査区は小面積の平坦面だったので、グリッドを設定せずにひとつの地区として扱った。

第1調査区は、道路センター杭を基準にして、10mごとに地区を設定して、遺物の取り上げ及び遺構の実測等をおこなった。第1調査区の比高差が東西で8mもあり、ピット等の遺構の検出地点の傾斜も強かったので、グリッドは遺構が密集する部分に局所的に使用した。

発掘調査の表土掘削で地山を追いかけると、標高の高いほうから作業した結果、遺構が密集する地点にあった黒色土を除去した。この黒色土は傾斜が変わる部分に堆積した有機土層と考えられ、結果として旧表土を含む性格の層であった。したがって、正確な調査をするためには、この黒色土上面で精査する必要があったのである。これは、発掘調査をおこなってしばらくたって気づいたことであったので、どれだけか遺構面を下げすぎたことが悔やまれる。平成2年度調査は、主要な遺跡部分の延長がせいぜい範囲であったことや、第1次調査との整合性を取るよう調査をおこなった。

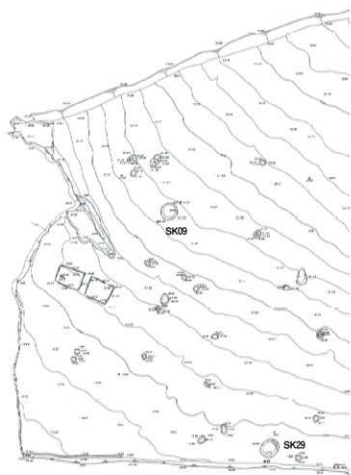
遺構の大部分は、丘陵から平野に接する傾斜変換点にあり、いくつかのまとまりを持っている。地形的には、SB04から西に張り出すような緩斜面が続く、SB02付近で最も張り出すようである。標高21mの等高線が直線的に通るのにはたいし、20.25mの等高線が幅広く張り出し、平坦面を作っているのである。この部分に、SB01から03などの主要な遺構群が存在する。SB01やSB04には山側に溝を付随しているが、SB02・04の山側には、SX07・08やSK19・28などの不正形な落ち込みの連続があり、その中に幾つかのピットがある。これらの性格を明確にできないが、ピットの中に土器を含むものが幾つかあるので、平坦面削削のための山側作業を示すものであろうとも推測できるが、確定的でない。

調査区南西部は、丘陵が平地に変化する箇所にあたる。調査では、水路などによって分断した状況であったので複雑に変化する地形の把握が困難であった。おそらく、2m程度の落差のある谷状の落ちとなり、底面にその流れの一部を示す溝が幾筋も検出できた。これらをSD101～104とした。SB04北西の調査区コーナーで大きな落ち込みを確認した。調査当初に期待した窯出した製品を搬出する何らかの施設にならないかとも考えたが、調査範囲の狭小さから、その可能性をとどめることとしたい。

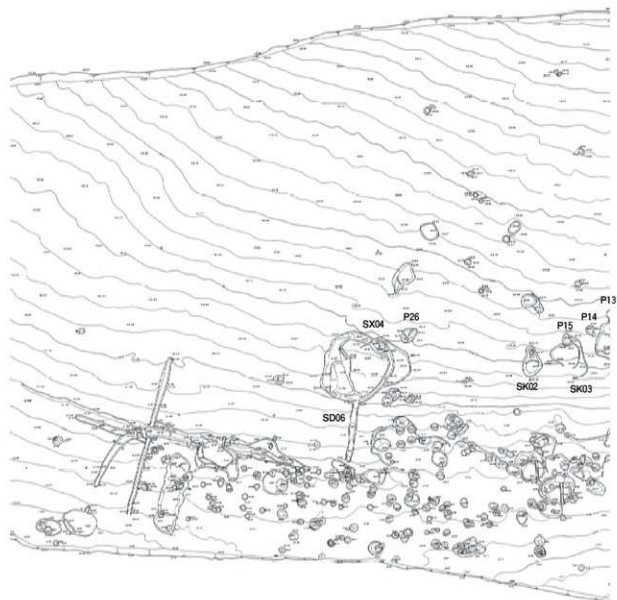
第2調査区は、数センチの表土層直下で地山となった。当該箇所はモウソウ竹が密集しており、重機掘削による竹の根の除去がうまくいかなかったため、大きな竹の根が土坑状の落ち込みとなってしまった。その後精査をかけたが、顕著な遺構を確認することができなかった。



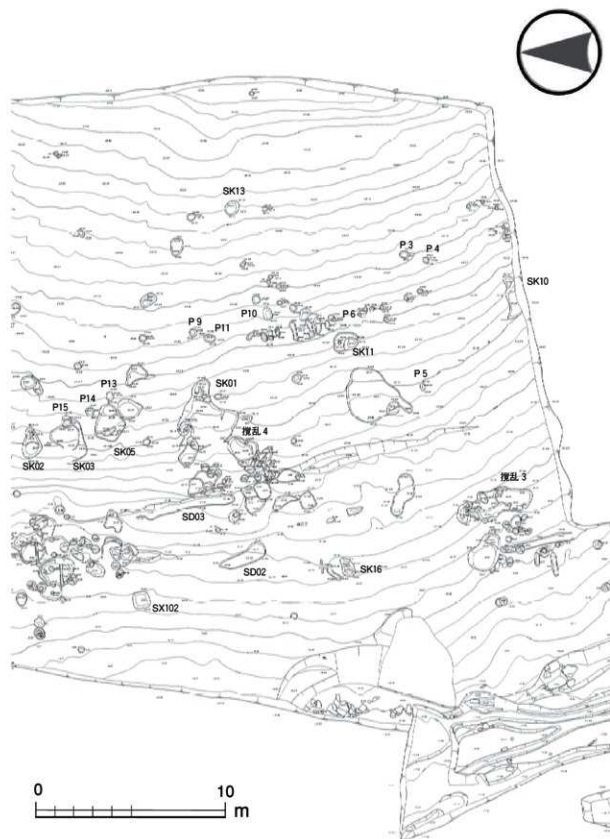
第4図 第2調査区実測図 (S=1/200)



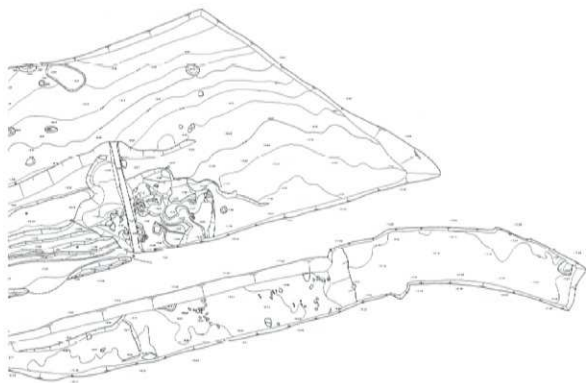
第5図 遺構平面図 (S=1/200)



第6図 遺構平面図 (S=1/200)



第7図 遺構平面図 (S=1/200)



第8図 遺構平面図 (S=1/200)

第2節 構 造 物

建物が溝や土坑など複数の遺構から構成あるいは重複しているため、本節ではこれらを構造物として一連の記述の中で報告したい。

SB01・SD01・SK27

SB01は桁行3間(7.52m)、梁間1間(2m)で、西側の柱がない状態で検出した。これが特殊な構造を示すのか、それとも傾斜した西側の柱遺構が削平された結果なのかにはわかに決しがたいが、前者の可能性を想定している。つまり、北の柱列でP67柱底高が標高20.37m、西となりの柱が標高20.57mとなり、傾斜があってもそれなりの柱穴の深さを持っていることから、西端の柱もその痕跡が存在してもよい。南側の柱列にしても同様であるので、西側の柱がない特殊な構造の建物であるか、それとも西側の柱が地面に掘り込んでいないような建物構造も想定できよう。このような想定によって、西側には壁のないオープンな建物と考えられる。

側柱間は広く、ピット68-ピット83間が2.6mで、SK27によって失われた柱を想定すればこの柱間が平均2.4mとなる。ピット67やピット68は柱が立ち腐れ状態を示し、ピット83が抜き取りのような土層状況である。柱痕跡からすれば直径20cm程度の柱である。以上の事実から、細い柱で支えられた壁を北・東・南にもち、西が開放されて外につながる小屋のような建物と想定できる。

SD01は、SB01の山側(東側)から北にかけて幅0.5~1mの「L」字状の溝である。標高21mの等高線にはほぼ平行に10mほど北に伸び、そこから地形の低いほうに直角に折れ曲がってSK04方に行く。建物から西に90cm、北に2~3mはなれて設置されており、西は傾斜によって自然消滅し、南はSX07に連続する可能性もあるが断絶しており、溝として存在するよりも「L」字に切りたてられた掘削になるようである。SB01との位置関係からそれに付随する施設である。

溝幅の狭い部分では下層に黒褐色砂質土と地山の混合土、上層に黒褐色土となって、単純な堆積である。山から流れ込む雨水や土石を流しだす機能であろう。

SK27上面にはSB01の柱が確認できたはずであったが、意識せずに土坑を掘削した。SK27は、南北2.24m東西1.6m深さ0.4mで、西側に頂部となる五角形を呈し、この頂部がSD01と切りあっている。断面では、SD01の埋土がSK27堆積最終末層と一体となっており、土坑が埋まった後掘削されたのか、それとも土坑埋積と一体となって溝を作っているのか判然としない。調査中は、SD01がSK27を切っていると理解した。

堆積は、基本的に黒褐色土砂質土で、地山土のブロックの入り方で層が分かれる。東西の方からレンズ状の堆積となっており、開放された穴に表土近くの土が流れ込んでいる状況である。須臾器や土師器は土坑の中段から底にかけて出土しており、一連の遺物がSK27より2m南のSD01にかけて出土している。前述のようにこの土坑と溝を別々の移行と理解するかしないかで、遺物の時間的な同時期性の評価が分かるとともに、遺構の性格及びSB01の構造にも問題が波及する。遺物群に混ざって白色粘土塊が出土した。これらは土器生産に使われた素材である可能性が高く、SB01の作業場の性格を暗示するであろう。

なお、SK26はSB01より後出である。SB01との位置関係から、この建物に伴う可能性があるのは、SK04・SK17であろうか。もとより確定的でない。

SB02・SX104・SK20

SB01から0.5m南に位置し、それに近接した状態である。SB01と同じ構造で、桁行3間(7.3m)、梁間1間(2m)である。SB01の検出状況と大きく異なるところは、西側の柱列が検出され、それも側中柱が非常に貧弱である。桁行の柱は約2.4m間隔となっており、梁間とともにSB01と同規格である。また、SB01とほぼ同じ規模であることも注意すべきである。

建物の南北東列の柱はいずれも50cm程度の深さがある。明確な柱痕跡を見出せないが、SB01とそれほど違うとは思われない。北から1本目の柱(ビット42)に対となる柱の深さが10cm程度であること、2本目の柱(ビット52)に対となる柱が検出できなかったことなどから、西側の柱がしっかりした構造ではなく、痕跡として残りにくい柱であったことを示し、SB01西側構造の推定を裏付けるものである。

建物の背後(山側)には不定形な落ち込みのSX07やSX08などがあり、排水施設はない。これらの不定形な落ち込みは、山側何らかの目的を持って掘削をおこなった結果である。SK20はその中のひとつである。南北1m東西0.9mの三角形の土坑で、西にビット41がある。SK20は下に掘り込むというよりも斜面を「L」字にカットしてできたようで、さらに掘り直しのような堆積も認められる(土層No1・2)。土師器碗が出土しており、掘削後はオープンであったことがわかる。なおビット41は下にあけられた穴というよりも斜面に向かって掘られた穴のようである。

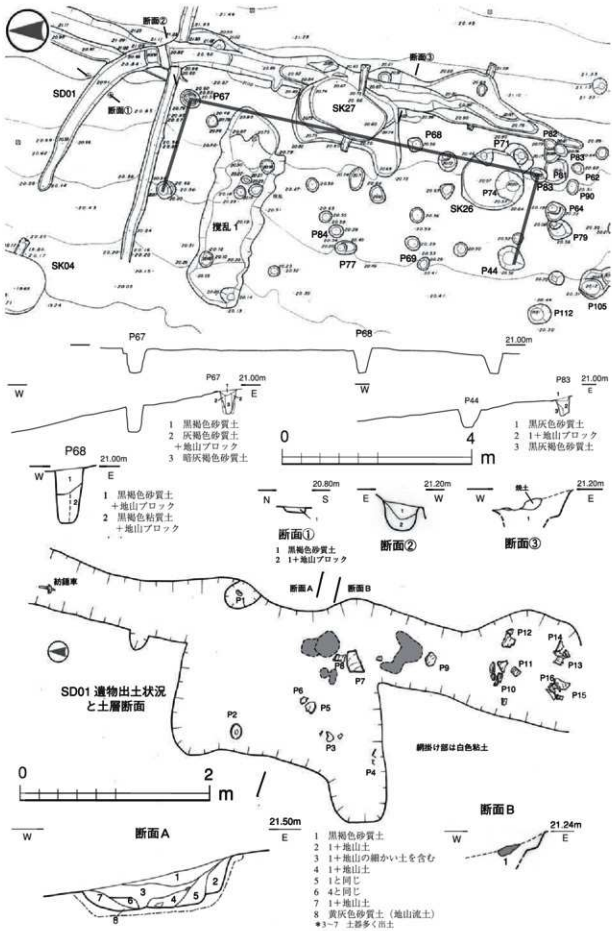
SX104はSB02西柱列の外すなわち建物空間の外に位置する。直径約0.8m深さ0.3mのほぼ円形を呈し、上面には全面に焼土として赤く変化している。南からの細長い穴と重複しているが、小動物によるものの可能性が高い。土坑は挿鉢状で、南から土が堆積しているように見えるが、これは先の穴に関係する土である。したがって、土坑の底には灰を中心とする層が見られ、上になるほど赤の発色が強くなる。炭粒がほとんど認められないという特徴から、灰を充填した炉などの機能であろうか。SB02に付属する施設と考えられる。

SB03・SK15・SK21・SK22・SK28・SK101

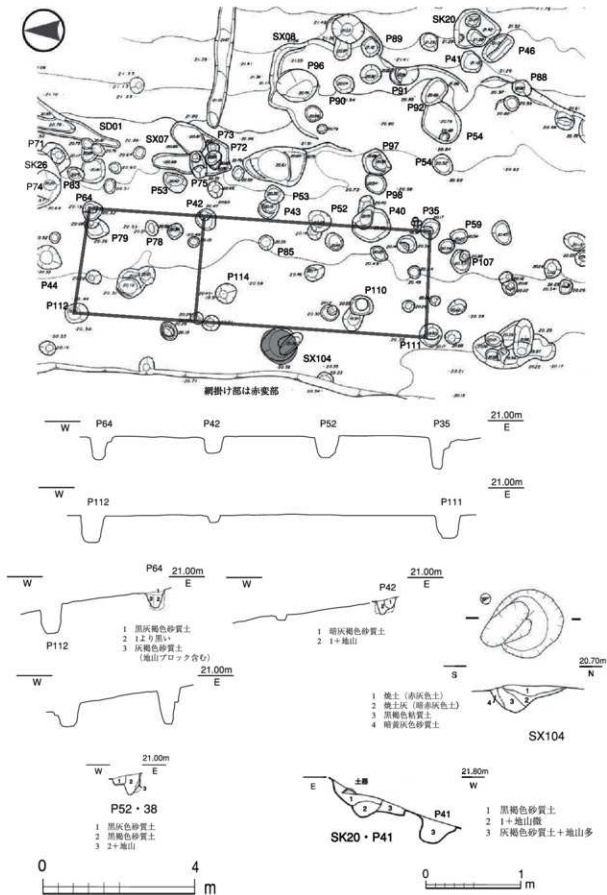
SB02から5m南に位置し、地形に平行して作られているので、SB01・02とやや向きを異にしている。南端の柱列を検出できなかったが、他の建物とおなじように桁行3間、梁間1間であったと推測される。桁行は2本の柱が確認され長さ4.8mである。全体的に柱間が大きく、東側の柱間が2.2m、2.7m、北の梁間が2.7mである。SB03は南北方向でも25cm程度の高低差がある。北東隅の柱穴(P32)がビット58やビット19よりも深いのは、下がり地形にあつて最も荷重がかかるためであろうか。一方、P19には須恵器杯蓋を裏返して礎板として使っているために、相対的に浅い柱穴となっている。他の建物は南北方向は水平を保つように作っているが、SB03は建物空間の一部に南北東西の方向にも水平面をもてない箇所がある。このような状況でも十分に機能を発揮できる建物であり、その機能とは何であろうか。この建物も西側柱列の痕跡が認められない。

SK15などは建物背後に掘削された穴で、SB02と同じ状況といえよう。SK15はSK28埋没後に掘削されたのであり、背後の斜面が、穴の掘削→埋没→穴の掘削を循環した作業をおこなっていたのであろう。SK21・22は東西に列をなしており、これも同じ現象であろう。SK21埋没後、低い位置にあるSK21を掘削し、あるていど埋ったあとに再掘削をおこなっている(土層No8)。SK19・SX05やビット65もそのように理解できるであろう。

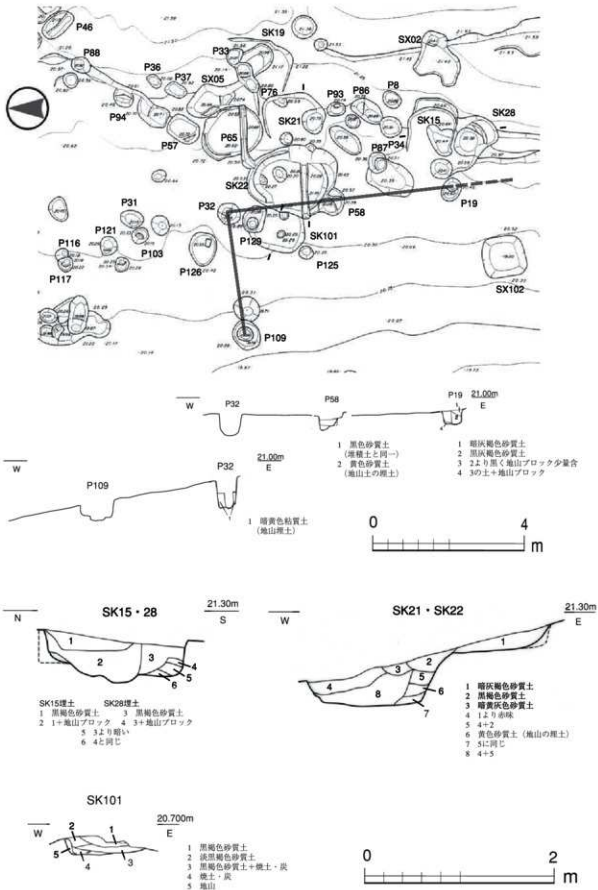
SK101は第1次調査で上面のみ検出した遺構(SX06)である。土坑はちょうど建物北東隅に取まるように位置しているために、SB03内部で機能した土坑の可能性も考えられる。南北1.4m東西0.85



第9図 SB01・SD01実測図 (S=1/80・40)



第10図 SB02実測図 (S=1/80)・SX104・SK12・20実測図 (S=1/40)



第11図 SB03実測図 (S=1/80)・SK15・21・22・101実測図 (S=1/40)

m深さ0.21mの浅い方形の土坑で、底には焼土と炭が厚くみられる。遺物は僅かしか出土していない。

SB04・SD05・SK18

SB01などの建物群から15mも離れて建てられている。しかし構造や規格は同じで、桁行3間(7.36～7.6m)、梁間1間(2.16～2.48m)である。建物の山側には、30～40cm離れて溝(SD05)がある。この建物延床はSB03以上に傾斜を持っており、北東コーナーと南西コーナーの落差が1mもある。建物から数mで谷の落ち込みとなっていることからくる地形の不安定さが原因と思われるが、東柱列がすべて40cmでいどの深さがあることより、建物構築当初から傾斜をもっていることがわかる。ただし南北方向で傾斜を見れば、50cmでいどなので、南西隅柱が非常に浅いことから、20cmくらいの削平あるいは土砂の流失があったものと推測される。柱痕跡は見られず、抜き取られた土層の状況である(ピット51)。

SD05は、建物に密接した状態にある。幅40cm前後で山側で15cm、谷側で数cmの深さしかないのて、SD01よりも簡易な溝といえよう。この溝は南に排水すると予想され、自然消滅しており全景を検出しきれていない。

SK18はSB04北東隅にあり、SD05に接する。東西2.05m南北1.55m深さ0.45mをはかり、東(山側)に段状となっている。黒褐色粘質土系の土で一段深い部分が埋った後、山側に再掘削されて埋った土が暗灰褐色土(土層No1・2)である。したがって、ふたつの土坑が重複しているのである。

第3節 土 坑

本節では、前節で記述に及んでいない主要な土坑について報告する。

SK01

標高23m付近に位置する不定形な土坑である。地形の高いほうから傾斜を持って低いほうに広がる穴となっており、地山の2次の移動である暗黄灰色砂質土がある。遺物は比較的多く出土し、土師器碗皿類とともに、須恵器瓶類や小壺が出土している。

SK02

標高23m付近に位置する楕円形の土坑である。地形の高いほうから傾斜を持って低いほうに広がる穴となっており褐色土を埋土とする。

SK04・17

SK04は、SD01から下がる位置にありSK17と並んでいるので、時期的に近接するかあるいはお互い意識して作られた遺構であろう。

SK04は南北1.85m東西1.25mの楕円形である。埋土はほぼ均一な黒色粘質土でSK17土層と同じである。山側がオーバーハングになっている。SK17は南北1.35m東西0.75mの中央がくびれた楕円形である。下層に淡灰褐色砂質土、上層にSK04とおなじ埋土(黒色粘質土)がある。底は平坦で西側を中心に床面からやや浮いた状態で土器が出土している。土層の状態からSK17廃絶後にSK04が作られたと考えられよう。

SK07

SK01から西に少し下った位置にある南北1.15m東西2.1mの不定形な土坑である。その中に小穴が幾つもあるので、浅い落ち込みを行こうとして認識したものであろう。ピット27～ピット30・ピッ

ト16で埋土は同じ暗灰褐色土である。

SK09

標高21.5mにある直径0.85m、深さ0.9mの土坑である。垂直に壁が下がり、土坑中央に小さなくぼみがある。窯場関係の遺構群から北に離れているので、それに関係する遺構ではない。土坑の形状から、落し穴遺構と考えられ、縄文時代に属するものであろうか。

SK11

標高24m付近にある南北1.3m東西0.95mの方形の土坑である。底は凹凸があり、灰褐色土や黒褐色土、黄色褐色土があり、何回か掘りなおされている様子であろう。

SK26

SB01と重複する直径1.3mの円形の土坑である。

SK29

標高20mにある直径0.9m、深さ0.7mの土坑である。垂直に壁が下がり、土坑中央に小さなくぼみがある。SK09とおなじような形状から、落し穴遺構と考えられ、縄文時代に属するものであろうか。

SX04

風倒木である。焼土が存在したものの、土坑の周囲が溝状にくぼみ暗褐色土が中に入り込む。遺物の出土はほとんどない。西中央の最も低いところからSD06が伸びている。SX04からの水が流れた痕跡であろう。

SX05

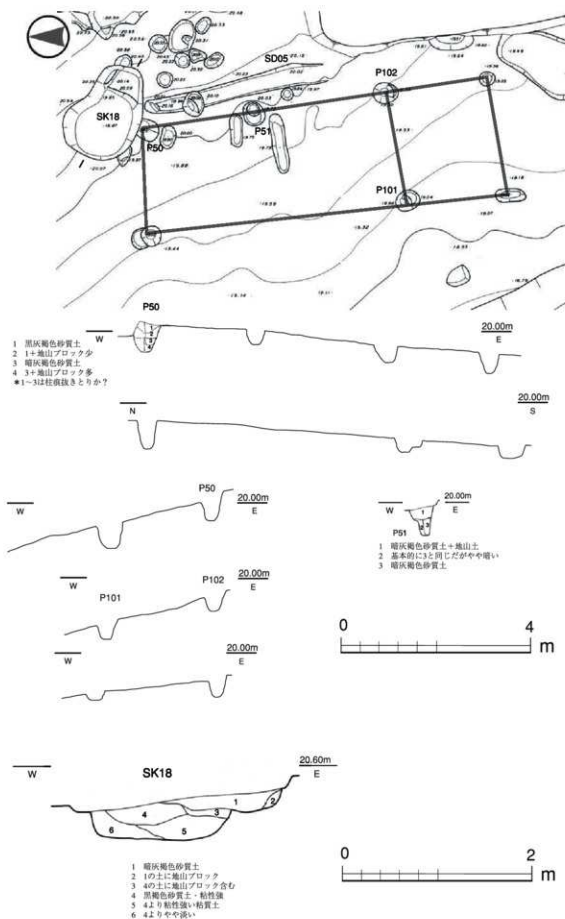
標高21m付近にある落ち込みで、SK19やビット65などと一体となった遺構である。これからSX08にかけて不整形な落ち込みが連続している。

SX07

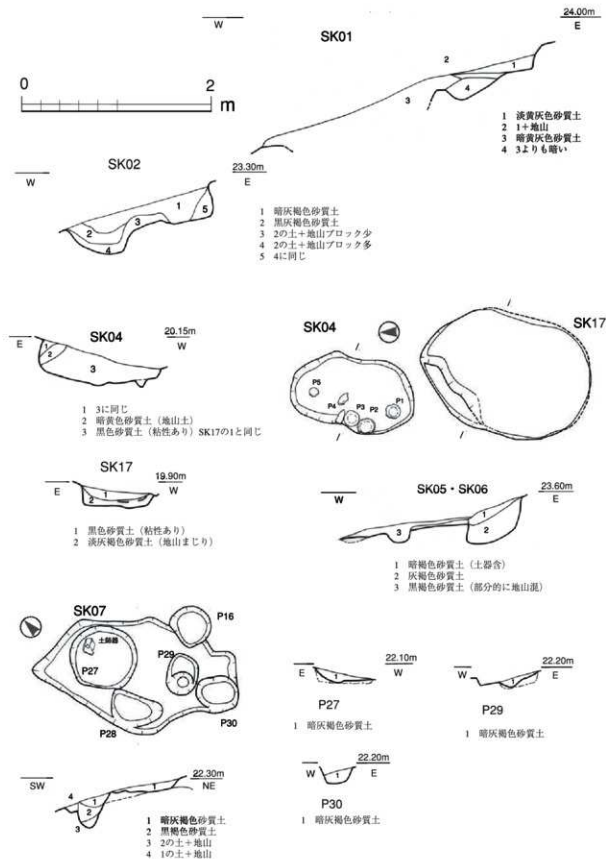
SD01南に接する落ち込みで、標高20.75mにある。ビット72・73・98などから構成される。

SX08

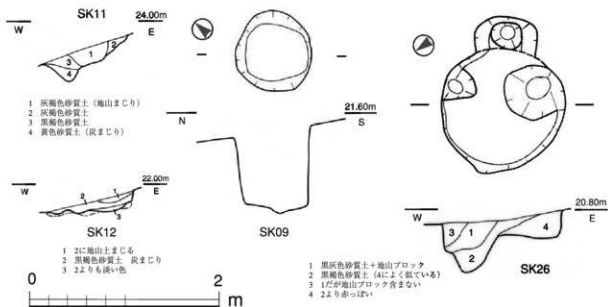
SX07とSX05間の落ち込みを総称する。標高21m～22m付近にまで及び、一連の掘り込みがより高いところまで及んでいる。



第12図 SB04・SD05・SK18実測図 (S=1/80・40)



第13図 土坑実測図(1)(S=1/40)



第14図 土坑実測図(2) (S=1/40)

第4節 溝

第2・3節で記述しなかった溝について報告する。

SD03

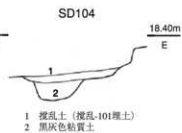
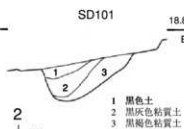
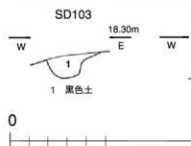
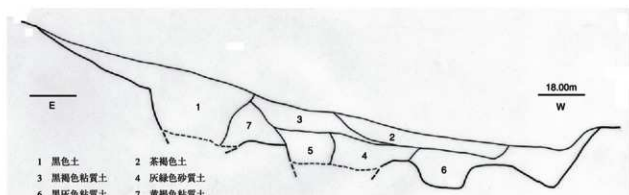
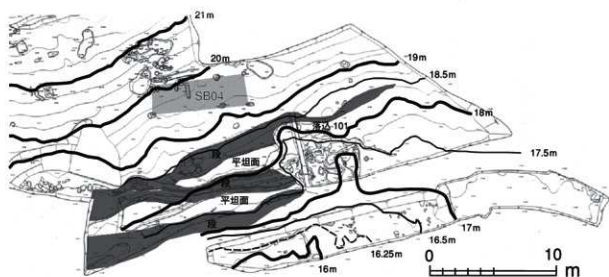
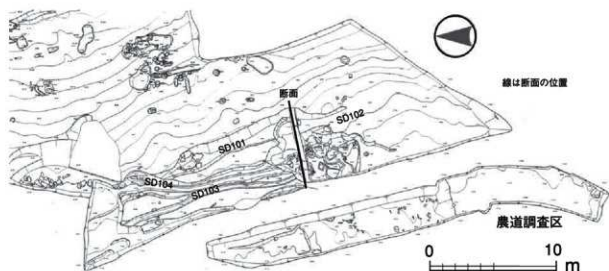
SK07西に隣接し、標高22m～21.5mにかけて南に下る溝で、幅60cm前後である。埋土は灰色で、南にある段地形の延長にあたり、畚に伴う遺構と理解した。

SD101～104

これらの溝群は、調査区南端に位置し、丘陵から伊久留川が作り出す低地部につながる場所になる。調査前は、丘陵から急激に落ち込んで沼の堆積にいたると予想していたが、意外にも傾斜のある地形となっていた。しかも断面図が示すように、単純な沼の堆積あるいは川の堆積状態でもない。SB04南西に大きな土坑状に掘り込んだような落込101があり、同じようなものが北西にも認められる。ただし、これについては、調査区に少し引っかけただけなのでよくわからない。遺構群が営まれた時代の景観がどのようであったのかという問題意識で溝群周辺を見てみたい。

SB04西の標高18.75mから19mにかけて丘陵の傾斜がかわって急になり、そこにSD101・102がある。これら西には若干の平坦面があってさらにSD104・103があり、また平坦面があって溝状の落ち込みを検出している。溝底の高さをよく見ると、SD101・102・104はほとんど同じであり、水を流す機能は希薄である。SD101は最も山側位置し、上層には黒色土、下層には有機土の粘質土となっており、あるていど滞った水の状態であるが、山側からの堆積によって徐々に浅くなっている。SD104も有機質の粘質土が堆積しており、ともに同じ状態である。これらの溝の西に平坦面があることからすれば、傾斜面に高さの違う位置に溝を掘って段を作っている状況ともいえよう。すなわち、斜面に目的を持って段を作っているのであり、その段が50cmていど(平坦面の比高差)からすれば、斜面を下りる機能と考えられよう。

この段が、SB04南西にある落込101をはさんだ南側には認められないという特徴がある。南側は、



第15図 第2次調査溝実測図 (S=1/300・1/40)

標高19.5m以下で傾斜が緩くなり、17.75mで平坦になっている。落込101北側では標高17.75m付近まで平坦面を作り出しており、南側と同じ高さはなだらかな傾斜からなる広場のようにになっている。落ち込み101につながる溝のうちSD103のみ南に下る傾斜を持っており、そこに流れこむ。落込101は北側を掘り込み、南西で農道調査区につながるようなので、落込101は水溜めのような遺構であろう。SD103の埋土は黒色土と有機物を含んだ層になっており、恒常的な水の流れは認めがたい。したがって、SD101から104は草が繁茂する状況にあって雨水が溜まるあるいは流れる様子であったと判断できる。

また、農道調査区では落込101とのつながりを明確に検出できなかったが、等高線の流れから判断して接続していたことは確実である。落込101接続部分から北にかけて傾斜を持って下がっていく。南側では緩やかに上がっているが、段を持つ北側では狭い平坦面から50cm～1mでいどの深さまで急に深くなっている。このような違いは、落込101をはさんだ傾斜の形状に大きく左右されたと考えられる。

以上より、古代の沼地の水際を標高17m付近に求め、落込101南の標高17.25から17.50mは葦などが繁茂する泥土の湿地が広がり、南側には伊久留川につながる水の溜まりであったと推測したい。

第5節 その他の遺構

前節までに報告したとおり、建物背後斜面に掘り込まれた土坑などの穴は、掘削－埋没－再掘削の作業が循環しており、底の形状も一定していない。つまり、遺構が当時掘削された状況によっては平面的にピットのように見えるものもある。たとえば、ピット1はSK19より1mほど高い位置にある穴だが、下にあげた穴というよりも斜面に対して横に掘った穴のようで、構造物を入れた痕跡はないものの、土器が出土している。付近には須恵器窯が点在しており、今回検出できなかった土師器窯も近在すると予想すれば、この一帯に土器の破片が広く散布して、結果的に小穴に土器が入り込むのであろう。それが風倒木や木根であったとしても。

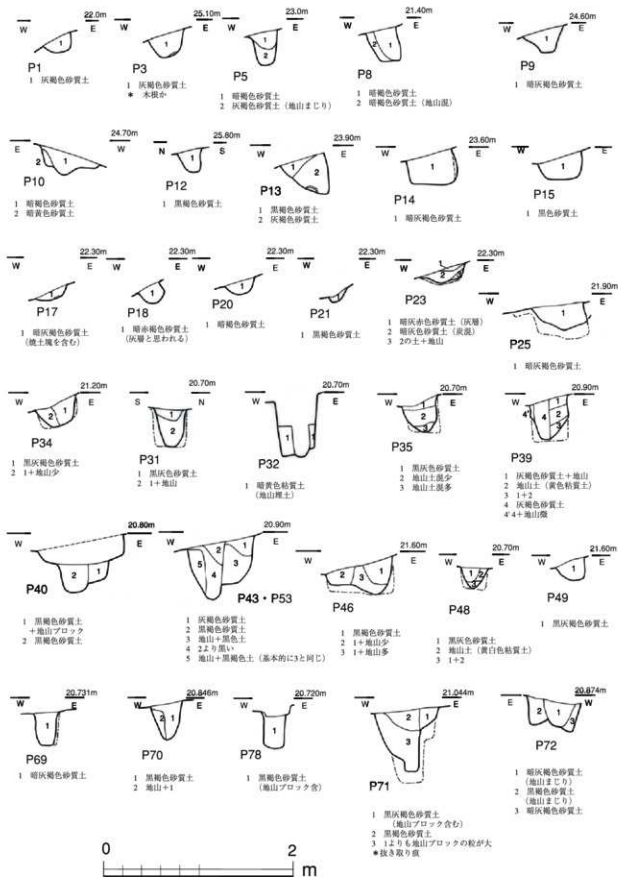
ピット13もピット1と同じ性格と考えられるが、底に接して意図的におかれた土師器碗がある。完形であることや伏せた状態で埋置していることから、まじない的な行為によるものであろう。いっぽう、ピット86は完形に近い土師器碗とともに、須恵器双耳瓶や須恵器甕など小穴にしては多数の土器を出土しており、廃棄された土器であろう。台石が出土しているピット93や多数土器を出土したピット97は後者の性格が強いだらう。

確実に柱穴としてのピットもある。ピット39・43・70・71・78・81などで、SB01などの簡易な構造を考えれば平坦面にあるピットの多くが柱穴と考えてもよいだろう。本報告では確実な柱穴を使って建物を復原できなかったのは、表土掘削によって失われた柱穴があったことが大きな要因であろう。

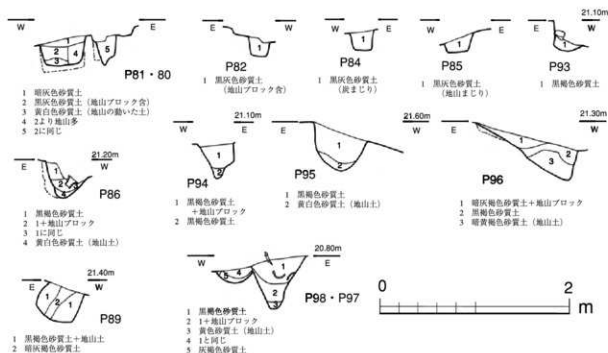
第6節 出土遺物

本節では、特徴的な遺物のみ報告し、観察表で表記できないことがらを中心に記述する。

1は須恵器杯蓋で口縁端部が小さく上に折れ曲がる。2は須恵器小型瓶。8は土師器耳皿の側縁の折り返し。13は底径から鉢であろう。9は土師器小杯としたが、口縁部欠損により可能性である。10・11は土師器鉢口縁部で、外に面を持つ。14は土師器碗で高台から見込みを欠損。17は内黒土師器碗で底面に1本の黒斑がある。20は須恵器で端面をもつことから脚と考えたが定かでない。24は須恵器



第16図 ビット実測図(1) (S=1/40)



第17図 ピット実測図(2) (S=1/40)

杯蓋がツマミをもたない。25は焼壺の激しい杯身。26は須恵器杯底面に大きく「練」と墨書している。きわめて薄い器壁である。33は高台鉢。36は焼壺の激しい須恵器杯身。38は須恵器の小型杯である。39は長頸壺の口縁部。

42は土師器の底部で底面から側面にかけてケズリによって整形されている。44は焼壺の激しい須恵器杯身。45は土師器鍋口縁部で推定口径に不安がある。53・54の口径がもう少し大きい可能性あり。56は土師器皿で、須恵器皿のような器形である。底部はケズリによって須恵器風にし、内面にミガキを施す。57・58は土師器で碗のような形態である。いずれも粗い胎土である。57には一部粘土輪積み痕もあり、2次的な熱を受けている。58は外面下部に小さな段をもっており、この部分に熱を受けて黒くこげている。底があったかどうか明確にできない。65は土師器高台皿で底面の回転糸切痕をきれいに消している。

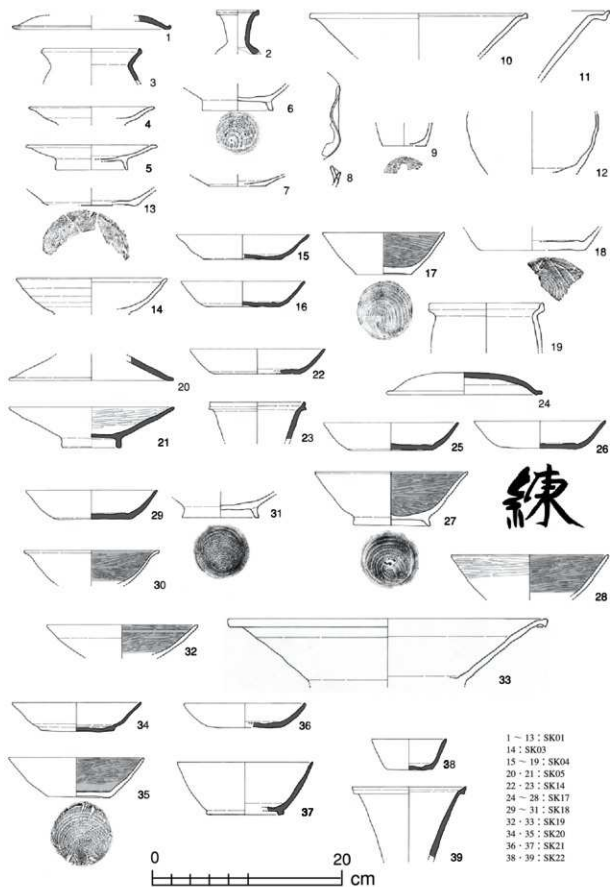
68は土師器長甕で、複数破片による図上復原。69は須恵器大甕で焼壺あり。72も焼壺の激しい須恵器高台杯身。75も焼壺の激しい須恵器杯身。88は須恵器葉口壺の蓋。90は高台を持つ瓶類である。底面に糸きり痕跡があり、高台底面に木目の痕跡がある。95は土師器碗で内面を中心に焼きムラとしての黒斑がある。97は土師器小型壺。器形は須恵器的である。98は土師器高杯である。須恵器杯蓋を逆さまにしたような杯部と須恵器長頸壺口縁部のように太くラップ状に広がる脚部をもつ。杯部の底外面はカキメがある。脚部はヘラミガキがある。須恵器写しの形態である。100は土師器甕で内面にカキメ風あり。101は土師器鍋取手である。指頭によって整形されている。

102は鍋あるいは瓶口縁部である。瓶にしては、直径がやや大きいように思われる。108は土師器鍋取手である。指頭によって整形されている。111は不明土製品である。筒状のものが二つに割れたのであろう。115はつまみのない須恵器杯蓋である。116は瓶底部で、スノコを受けるための突起がある。おそらく3箇所にあると思われる。118は焼壺の激しい須恵器杯身である。119も焼壺の激しい須恵器杯身である。121は須恵器双耳瓶で、焼成中に破断したのか大部破断面が内側に向くところがある。

126はつまみがあった痕跡を持つ須恵器杯蓋である。129・130は指頭によって整形された土師器脚である。獸脚のようだが、製品としては粗雑な作りである。

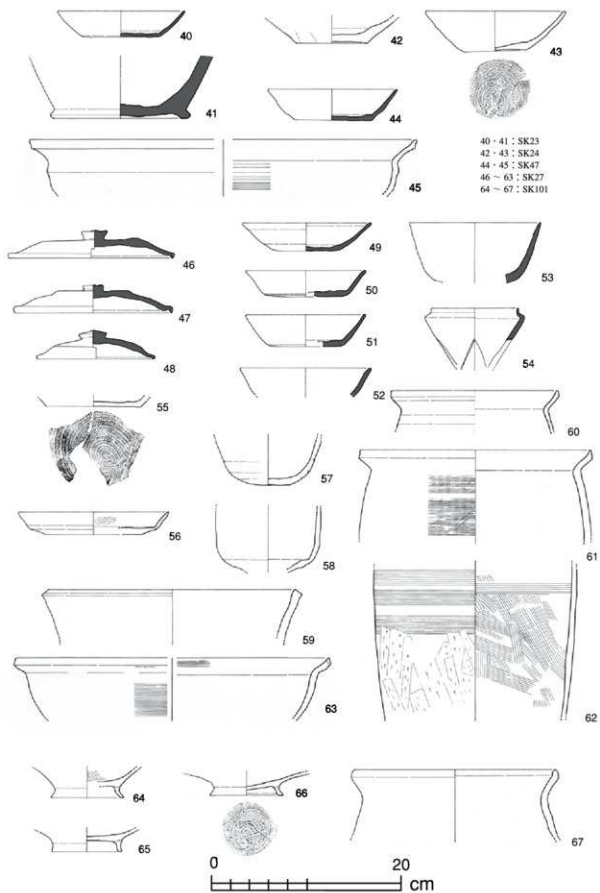
134・135は瓦塔で136がその可能性のあるものである。ともに須恵器質だが白っぽく焼きあがっている。134・135は瓦塔の屋根根部で、瓦の表現を上下から工具を押し当てることで表現している。136は塔最上部の相輪基部にあたると思われる、十字に交差する粘土の帯がある。151は須恵器小型甌類で、細口長頸壺になろうか。152は須恵器で高台を持つ。杯身の高台とは異なり、小型壺の底部になろうか。154は須恵器小型甌というべきものであろうか。159は鉄鉢写しの須恵器鉢である。166～170は土師器小型杯である。多様な形態がある。

172は粘土を型のような造形物に押しあてて焼き上げた土製品のように見える。押し当てたときの指の痕跡が明瞭である。174は取っ手の形状をしている。表採品。175は中央に小さな穴が貫通した円錐台形の土製品である。はずみ車かとも推定できる。176は窯の窯壁と須恵器が融着したものである。近くに須恵器窯の存在をしめす。177は砥石で、黒色を呈し粘板岩系の石材である。178はピット93埋土中から出土した。火熱を受けており破損したために廃棄されたのであろう。上面が平坦で、作業の台石として考えた。179は砥石で、きめの細かい泥岩質の石材である。180も178と同じ台石であろう。火熱を受けている。

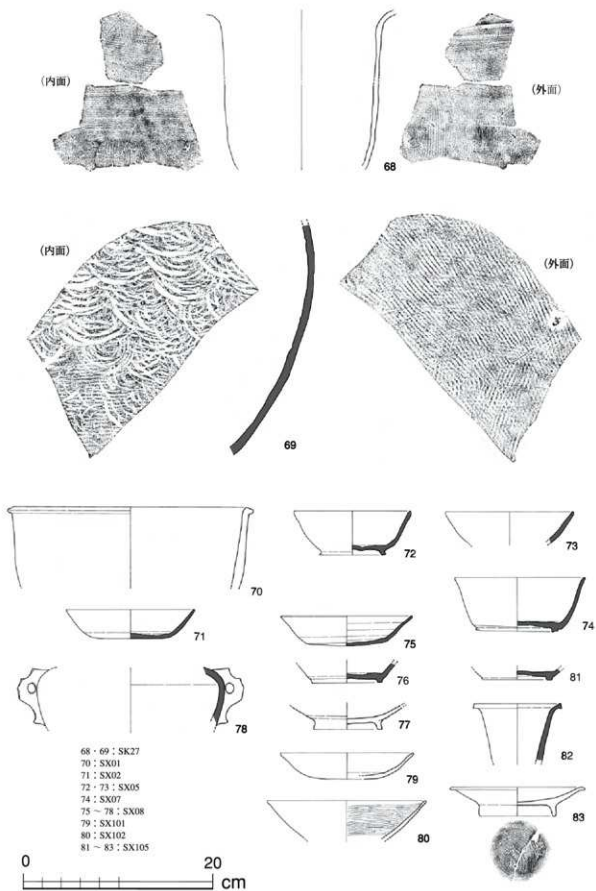


- 1 ~ 13 : SK01
- 14 : SK03
- 15 ~ 19 : SK04
- 20 ~ 21 : SK05
- 22 ~ 23 : SK14
- 24 ~ 28 : SK17
- 29 ~ 31 : SK18
- 32 ~ 33 : SK19
- 34 ~ 35 : SK20
- 36 ~ 37 : SK21
- 38 ~ 39 : SK22

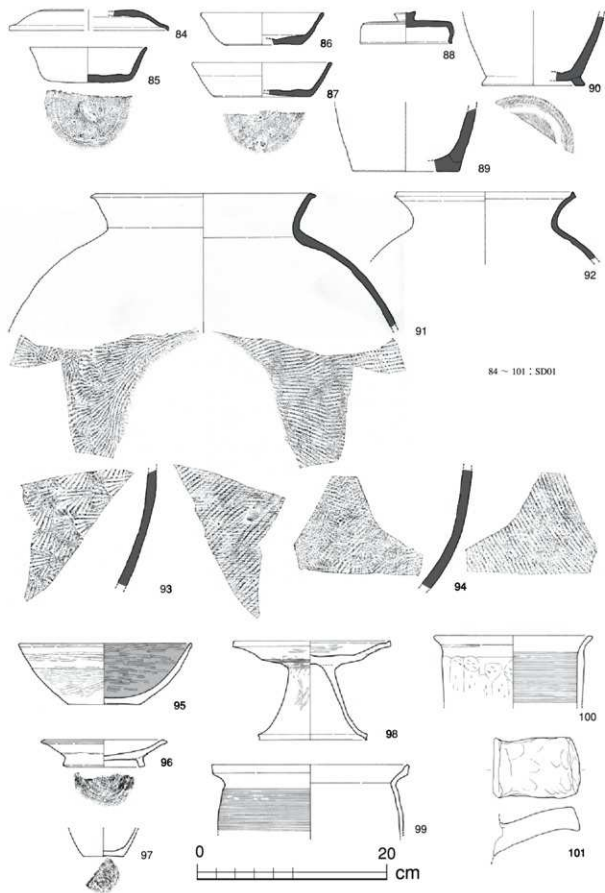
第18図 出土土器 (1) 断面網かけは、須恵器 (～第25図)



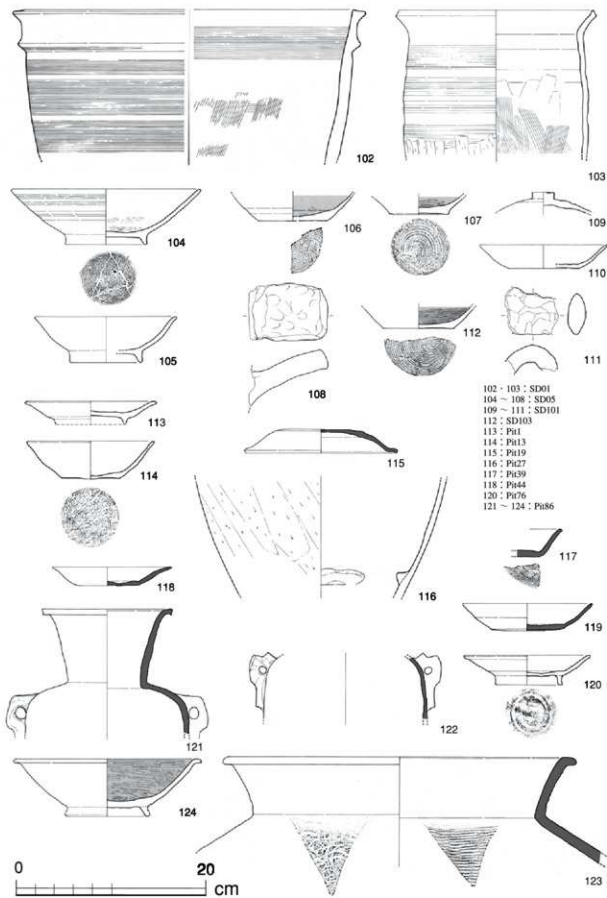
第19図 出土土器(2)



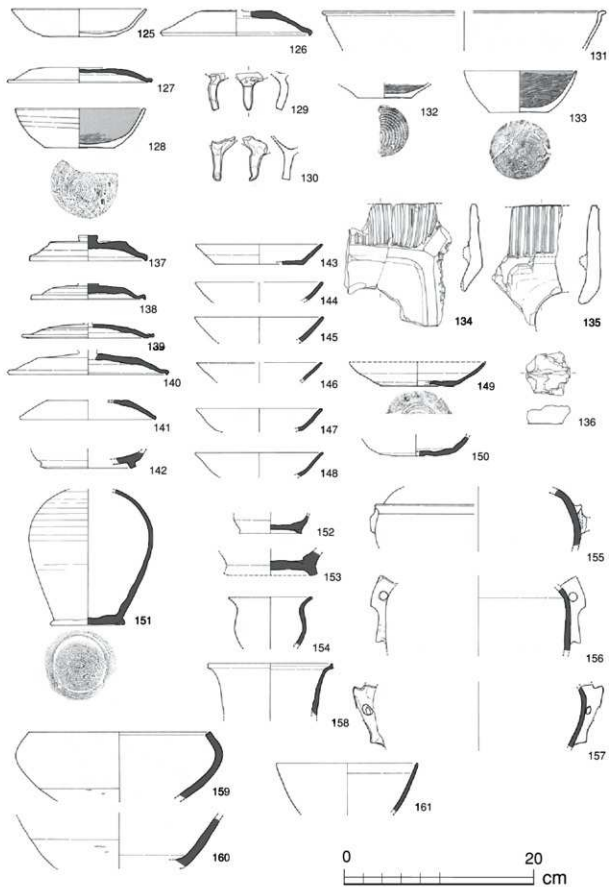
第20図 出土土器(3)



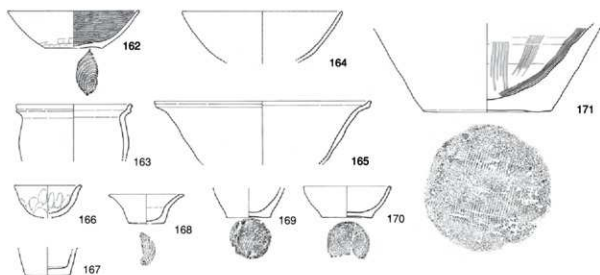
第21図 出土土器(4)



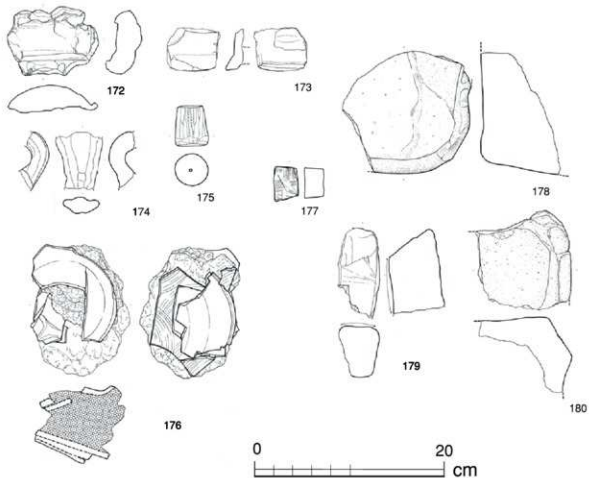
第22圖 出土土器 (5)



第23図 出土土器(6)



第24図 出土土器 (7)



第25図 出土土製品・石器等

第2表 出土遺物観察表

報告番号	器種	遺構	出土位置	法量(cm)	調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	胎土	変成	実測番号	備考	
1	蓋(須恵器)	SK01	北側	口径:16.9	ヨコナテ	ヨコナテ	にぶい 橙	にぶい 橙	微砂粒やや多く 含む	不良	69	須恵器的	
2	瓶(須恵器)	SK01		口径:4.5	ヨコナテ	ヨコナテ		暗灰	1mm以下の砂粒 含む	良	45	焼垂 降灰	
3	小型壺(須恵器)	SK01		口径:10.7	ヨコナテ	ヨコナテ		灰	精緻	良	165		
4	高台皿(土師器)	SK01	上面	口径:13.4	ヨコナテ	ヨコナテ		橙	微砂粒を少量含 む	良	64	一部に黒炭	
5	高台坏(土師器)	SK01	上面 アゼ	口径:14.0 器高: 2.7 底径:7.7	ヨコナテ	ヨコナテ		浅黄橙	1mm前後の砂粒 を含む	良	68		
6	高台碗(土師器)	SK01	アゼ	底径:7.6	ヨコナテ	ヨコナテ, 回転糸切り		橙	0.5mm以下の砂 粒含むが比較的 精良,海面骨片 含む	良	156		
7	碗?(土師器)	SK01		底径:6.0	ヨコナテ	ヨコナテ, ヘラ切り		浅黄橙	微砂粒を少量含 む	不良	66	一部に黒炭 須恵器的	
8	耳皿(土師器)	SK01	北側		ヨコナテ	ヨコナテ		橙	密	やや 良	67		
9	小杯(土師器)	SK01	アゼ	底径:4.6	ヨコナテ	ヨコナテ, 糸切り		にぶい 橙	微砂粒を含む	良	158		
10	鉢(土師器)	SK01	上面・ 上層	口径:23.0	強いナデ, ヨコナテ	ヨコナテ		橙	1mm以下の砂粒 含む,海綿骨片 微量含む	良	63		
11	鉢(土師器)	SK01	上面・ 上層	口径:27.1	ヨコナテ	ヨコナテ		橙	海綿骨片,雲母, 1mm以下の砂粒 含む	良	62		
12	鉢(土師器)	SK01	北側 上面 アゼ					橙	微砂粒を少量含 む	やや 良	70		
13	碗(土師器)	SK01 SK07		底径:9.4	ヨコナテ	ヨコナテ, 回転糸切り		浅黄橙	微砂粒を含む	やや 良	71		
14	碗(土師器)	SK03		口径:16.0	ヨコナテ	ヨコナテ			微砂粒多く,1.5 ~2.0mmの砂粒 含む	やや 良	65		
15	坏(須恵器)	SK04		口径:14.2 器高: 2.6 底径:8.4	ヨコナテ, ナデ	ヨコナテ, ナデ		灰	1mm前後の砂粒 を含む	良	31		
16	坏(須恵器)	SK04	底面	口径:13.2 器高: 2.7 底径:8.0	ヨコナテ, ナデ	ヨコナテ, ヘラ切り		灰白	1mm前後の砂粒 を含む	良	72		
17	内黒碗(土師器)	SK04	上面	口径:13.0 器高: 4.5 底径:5.9	ミガキ	ヨコナテ, ケズリ,回 転糸切り		黒	浅黄橙	1mm前後の砂粒 を含む	良	115	底面に焼 きムラ
18	底部(土師器)	SK04	上面	底径:11.4	ヨコナテ, ナデ	ケズリ後ナ デ,糸切り		橙	明黄褐	1mm前後の砂粒 を多く含む	良	73	
19	小壺(土師器)	SK04 SK17		口径:12.4	ヨコナテ	ヨコナテ		浅黄橙	1mm前後の砂粒 を含む	良	74		
20	?(須恵器)	SK05	上面	底径:17.6	ヨコナテ	ケズリ,ヨ コナテ		灰白	灰白	1mm前後の砂粒 を含む	良	36	
21	高台皿(土師器)	SK05	上面	口径:17.6 器高: 4.35 底径:6.3	ミガキ,ナデ	ケズリ,ナデ ヘラ切り		浅黄橙	浅黄橙	1mm前後の砂粒 を含む	良	35	
22	坏(須恵器)	SK14	上面	口径:14.4 器高: 2.65 底径:9.2	ヨコナテ, ナデ	ヨコナテ, ヘラ切り		灰	灰	1mm前後の砂粒 を含む	良	80	
23	壺(須恵器)	SK14	上面	口径:10.2	ヨコナテ	ヨコナテ, ナデ		暗オリ ープ灰	暗オリ ープ灰	1mm前後の砂粒 を含む	良	81	
24	蓋(須恵器)	SK17	P2	口径:16.6	ヨコナテ, ナデ	ナデ,ケズ リ		にぶい 橙	にぶい 橙	1mm前後の砂粒 を含む	不良	29	
25	坏(須恵器)	SK17	P1	口径:14.4 器高: 3.0 底径:9.3	ヨコナテ, ナデ	ケズリ後ナ デ,ヘラ切り		灰白	灰白	1mm前後の砂粒 を含む	良	30	
26	坏(須恵器)	SK17	P3	口径:14.0 器高: 2.9 底径:8.8	ヨコナテ, ナデ	ケズリ後ナ デ,ナデ,ヘ ラ切り		灰白	灰白	1mm前後の砂粒 を含む	良	28	墨書「練」
27	内黒高台碗(土師器)	SK17	P5・ P4	口径:16.3 器高: 5.7 底径:8.2	ミガキ	ヨコナテ, ケズリ,回 転糸切り		黒	浅黄橙	1mm前後の砂粒, 海面骨片を含む	良	34	一部に黒 炭あり
28	内黒碗(土師器)	SK17	P4	口径:16.8	ミガキ	ミガキ,ケ ズリ		にぶい 黄橙	1mm前後の砂粒, 海面骨片を含む	良	33	一部に黒 炭あり	
29	坏(須恵器)	SK18		口径:14.0 器高: 3.1 底径:8.3	ヨコナテ	ヨコナテ, ヘラ切り痕		明オリ ープ灰	明オリ ープ灰	1mm前後の砂粒 を含む	良	23	

報告番号	器種	遺構	出土位置	法量(cm)	調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	胎土	焼成	実測番号	備考
30	碗? (土師器)	SK18		口径:14.4	ミガキ	ヨコナデ、ケズリ後ナデ	黒	にぶい黄橙	1mm前後の砂粒、海面骨片を含む	良	58	内黒
31	高台碗 (土師器)	SK18		底径:8.2	ナデ	ヨコナデ、回転系切り	浅黄橙	浅黄橙	雲母、赤色粒を含む	良	59	
32	内黒皿 (土師器)	SK19	アゼ	口径:16.2	ミガキ	ヨコナデ、ケズリ	黒	浅黄橙	1mm前後の砂粒を含む	良	79	
33	鉢 (土師器)	SK19		口径:33.8	ナデ	ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	1mm前後の砂粒、赤色粒を含む	良	78	
34	坏 (須恵器)	SK20		口径:13.8 器高:3.1 底径:8.0	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラ切り	灰	灰	1mm前後の砂粒を含む	良	26	
35	内黒碗 (土師器)	SK20		口径:14.4 器高:4.2 底径:6.6	内黒、ミガキ、ナデ	ヨコナデ、ケズリ後ナデ、回転系切り	黒	黄橙	1mm前後の砂粒、海面骨片を含む	良	25	
36	坏 (須恵器)	SK21	アゼ	口径:13.0 器高:2.6 底径:7.8	ヨコナデ	ナデ、ヘラ切り	オリブ灰	オリブ灰	1.5mm前後の砂粒を含む	良	75	
37	高台坏 (須恵器)	SK21	上面	口径:14.4 器高:5.6 底径:8.3	ヨコナデ	ヨコナデ	オリブ灰	オリブ灰	1mm前後の砂粒、赤色粒を含む	良	22	
38	小坏 (須恵器)	SK22		口径:8.0 器高:3.3 底径:4.8	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ヘラ切り	オリブ灰	オリブ灰	1mm前後の砂粒を含む	良	76	
39	壺 (須恵器)	SK22	アゼ	口径:12.2	ヨコナデ	ナデ、ケズリ	オリブ灰	灰	1mm前後の砂粒を多く含む	良	77	
40	坏 (須恵器)	SK23	上面	口径:13.6 器高:2.8 底径:8.4	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラ切り痕	オリブ灰	オリブ灰	1mm前後の砂粒を含む	良	27	
41	密底部 (須恵器)	SK23	上面	底径:15.0	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	灰白	灰	1mm前後の砂粒を含む	良	57	底内面 内面 植物痕あり
42	碗 (土師器)	SK24	上面	底径:7.6	ナデ?	ケズリ、ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の石英、長石粒、焼土塊、雲母含む	良	46	
43	坏 (土師器)	SK24	上面	口径:14.9 器高:4.3 底径:6.6	ヨコナデ	ヨコナデ、回転系切り	橙	橙	0.5mm以下の石英、長石粒、海面骨片含む	良	21	焼重
44	坏 (須恵器)	SK25	上面	口径:13.8 器高:3.3 底径:8.3	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラ切り	灰色	灰色	0.5mm以下の石英、長石粒を含む	良	20	焼重
45	鉢 (土師器)	SK25	上面	口径:41.0	カキメ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下の石英、長石、焼土塊含む	並	47	
46	蓋 (須恵器)	SD 01 SK27	P1	口径:17.6 器高:2.95 つまみ径:2.7	ヨコナデ	ケズリ、ヨコナデ	灰	灰	0.5mm前後の砂粒を含む	良	10	
47	蓋 (須恵器)	SK27 SD01	P5	口径:17.0 器高:2.9 つまみ径:2.2	ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ケズリ	灰黄橙	にぶい黄橙	0.5mm前後の砂粒を含む	やや不良	16	
48	蓋 (須恵器)	SK27 SD01	P2	口径:12.6 器高:3.0 つまみ径:2.9	ヨコナデ	ヨコナデ、ケズリ	灰白	灰白	0.5mm前後の砂粒を含む	良	15	
49	坏 (須恵器)	SD01 SK27		口径:13.8 器高:3.0 底径:7.4	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	灰白	灰白	1mm前後の砂粒を含む	良	1	
50	坏 (須恵器)	SD01 SK27		口径:12.7 器高:2.8 底径:8.3	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラ切り	灰	灰	2~3mm大の礫	良	19	
51	坏 (須恵器)	SK27 SD01	アゼ	口径:12.8 器高:3.4 底径:8.2	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラ切り	灰白	灰白	0.5mm前後の砂粒を含む	不良	24	
52	坏 (須恵器)	SK27		口径:14.0	ヨコナデ	ヨコナデ	灰	灰	0.5mm以下の白色粒を含む	良	172	
53	碗? (須恵器)	SD01 SK27		口径:14.0	ヨコナデ	ヨコナデ	明オリブ灰	灰	1mm前後の砂粒を多く含む	良	2	
54	小壺 (須恵器)	SK27		口径:9.4	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白	灰白	0.5mm前後の砂粒、海綿骨片含む	良	84	4箇所の透かし
55	底部 (土師器)	SK27 SD01	アゼ	底径:10.0	ヨコナデ	ナデ、回転系切り	にぶい橙	にぶい橙	1mm前後の砂粒を含む	良	55	
56	皿 (土師器)	SK27		口径:16.0 器高:2.4 底径:10.4	ミガキ	ミガキ、ケズリ	浅黄橙	浅黄橙	0.5mm前後の砂粒、赤色粒を含む	良	163	一部黒斑

報告番号	器種	造構	出土位置	法量(cm)	調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	胎土	焼成	実測番号	備考
57	碗(土師器)	SD01	P1	底径:4.3	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	0.5mm前後の砂粒を含む	良	152	内面に焦げ、外面に煤僅か
58	底部(土師器)	SK27 SD01 P2			ケズリ後ナデ、ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm前後の砂粒を多く含む。赤褐色、海綿骨片を含む	良	56	被熱痕
59	鍋(土師器)	SK27		口径:27.4	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	0.5mm前後の砂粒を含む	良	82	
60	甕(土師器)	SK27 SD01	土器群	口径:17.9	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙	にぶい橙	0.5~1.0mmの砂粒を含む	並	43	
61	甕(土師器)	SK27		口径:24.7	ヨコナデ	タタキ後カキメ	浅黄橙	浅黄橙	0.5mm前後の砂粒を含む	良	85	
62	甕(土師器)	SK27 SD01 P9			ヨコナデ後カキメ	ヨコナデ後カキメ、ケズリ	浅黄橙	橙	微砂粒、2.0mmの煤含む	並	44	
63	鍋(土師器)	SK27		口径:33.4	カキメ、ヨコナデ	ヨコナデ、カキメ	橙	橙	0.5mm前後の砂粒、海綿骨片を含む	良	83	外面煤付着
64	高台碗(土師器)	SK101		底径:7.7	ミガキ	ヨコナデ、ナデ	明褐灰	にぶい橙	0.5mm以下の雲母	並	169	
65	高台碗(土師器)	SK101		底径:7.5	ヨコナデ	ヨコナデ、回転糸切り	にぶい橙	にぶい橙	0.5mm以下の雲母含む	並	139	
66	高台皿(土師器)	SK101		底径:7.8	摩耗	ヨコナデ、回転糸切り	橙	橙	0.5mm以下の細砂粒、海面骨片を含む	並	120	
67	甕(土師器)	SK101		口径:21.6	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙	にぶい橙	雲母、0.5mm以下の細砂粒を含む	並	119	外面煤、内面灰化物
68	甕(土師器)	SK27 SD01	P6		ナデ、カキメ、ケズリ	カキメ、ケズリ	浅黄橙	浅黄橙	1mm前後の砂粒を含む	良	54	
69	甕(須恵器)	SK27 SD01	P7		青海波タタキ、平行タタキ	平行タタキ	灰	黒	0.5mm前後の砂粒を含む	良	50	
70	鉢(土師器)	SX01	上面	口径:26.0	ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm前後の砂粒を含む	良	102	
71	坏(須恵器)	SX02		口径:13.6 器高:3.1 底径:8.6	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ、ヘラ切り	灰白	灰白	1mm前後の砂粒を含む	不良	101	
72	高台碗(須恵器)	SX05		口径:12.4 器高:4.7 底径:7.0	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ、ヘラ切り	灰	灰	1mm前後の砂粒を含む	良	103	焼重
73	坏(須恵器)	SX05		口径:13.6	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm前後の砂粒を含む	良	104	
74	高台碗(須恵器)	SX07		口径:13.8 器高:5.8 底径:8.7	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ、ヘラ切り	灰	灰	1mm前後の砂粒を含む	良	100	
75	坏(須恵器)	SX08		口径:14.0 器高:3.2 底径:8.4	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラ切り	灰白	灰白	微砂粒、4mmの煤含む	並	96	
76	高台坏(須恵器)	SX08		底径:7.4	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラ切り	灰	灰	0.5~1.0mmの砂粒やや多く含む	堅硬	98	
77	高台碗(土師器)	SX08		底径:7.3	ヨコナデ	ヨコナデ、回転糸切り	橙	橙	微砂粒、1.0mmの砂粒やや多く含む	並	97	
78	双耳瓶(須恵器)	SX08			ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	灰	灰	0.5mm以下の砂粒を含む	良	155	
79	坏(須恵器)	SX101		口径:14.2 器高:2.8 底径:8.2	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ	ナリーブ灰	ナリーブ灰	1mm前後の砂粒を含む	良	126	
80	碗(土師器)	SX102		口径:17.0	ミガキ	ヨコナデ	にぶい橙	にぶい橙	1mm前後の砂粒を含む	良	127	
81	高台坏(須恵器)	SX105		底径:7.5	ヨコナデ	ナデ、ヘラ切り	灰	灰	1mm前後の砂粒を含む	良	142	
82	甕(須恵器)	SX105		口径:9.2	ヨコナデ	ヨコナデ	灰	灰	1mm前後の砂粒を含む	良	141	降灰
83	高台坏(土師器)	SX105		口径:14.4 器高:3.1 底径:8.2	ヨコナデ、ナデ	ケズリ、ナデ、回転糸切り	灰白	灰白	1mm前後の砂粒を含む	良	125	
84	甕(須恵器)	SD01	上層	口径:16.9	ヨコナデ	ケズリ、ヨコナデ	褐灰	褐灰	0.5mm以下の砂粒を含む	やや不良	51	

報告番号	器種	遺構	出土位置	法量(cm)	調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	胎土	焼成	実測番号	備考	
85	坏(須恵器)	SD01		口径:12.5 器高:3.7 底径:9.4	ヨコナテ	ヨコナテ、ヘラ切り	灰	灰	0.5mm前後の砂粒を含む	良	13	ヘラ記号あり	
86	坏(須恵器)	SD01		口径:13.0 器高:3.4 底径:8.5	ヨコナテ	ヨコナテ、ヘラ切り	灰白	灰黄褐	0.5mm前後の砂粒を含む	やや不良	17		
87	坏(須恵器)	SD01	Pit	口径:14.8 器高:3.7 底径:10.2	ヨコナテ、ナデ	ヨコナテ、ヘラ切り	灰白	灰白	0.5mm前後の砂粒を含む	不良	18		
88	蓋(須恵器)	SD01	底直上	口径:9.8 器高:3.3 つまみ径:2.3	ヨコナテ	ヨコナテ	灰	灰	0.5mm前後の砂粒を含む	良	14	燒歪、外面降灰	
89	瓶(須恵器)	SD01		底径:11.3	ヨコナテ	ケズリ、ナデ	褐灰	灰	0.5~1.0mm大の砂粒を含む	良	32	内面降灰	
90	甕(須恵器)	SD01	上層	底径:11.0	ヨコナテ	ヨコナテ	灰	灰	0.5mm以下の砂粒、黒色粒を含む	良	48		
91	甕(須恵器)	SD01 SX 01-07		口径:23.7	ヨコナテ、当具	ヨコナテ、タタキ	灰	灰	0.5mm前後の砂粒を含む	良	9	断面:灰、赤色	
92	甕(須恵器)	SD01	P10	口径:18.6	ヨコナテ	ヨコナテ、タタキ	灰	灰	0.5mm前後の砂粒、3mm大の礫含む	良	49	降灰	
93	甕(須恵器)	SD01	上面		タタキ	タタキ	灰	暗灰	0.5mm前後の砂粒、黒色粒を含む	良	53	外面降灰	
94	甕(須恵器)	SD01	P10		タタキ	タタキ	灰	灰オリーフ	1mm前後の砂粒、黒色粒を含む	良	52		
95	椀(土師器)	SD01	P14 Pit	口径:18.3 器高:6.5 底径:7.6	ミガキ	ミガキ、ヨコナテ、ケズリ	橙	橙	海綿骨片多く含む	良	5		
96	高台皿(土師器)	SD01	上層	口径:13.4 器高:2.9 底径:8.7	ヨコナテ	ヨコナテ、回転糸切り	橙	橙	微砂粒、1.0~2.0mmの砂粒含む	良	7		
97	小杯(土師器)	SD01		底径:4.2	ヨコナテ	ヨコナテ、回転糸切り	淡黄	淡黄	微砂粒を含む	やや不良	8		
98	高坏(土師器)	SD01	上層	口径:16.7 器高:10.5 底径:11.4	ヨコナテ、ミガキ	ヨコナテ、ミガキ、カキメ	橙	橙	微砂粒、1.0~1.5mmの砂粒含む	良	4		
99	甕(土師器)	SD01	上面	口径:20.9	ナデ、ヨコナテ	ヨコナテ、カキメ	にぶい橙	にぶい橙	微砂粒、0.5~1.0mmの砂粒含む	並	3		
100	鉢(土師器)	SD01		口径:16.6	ヨコナテ、カキメ	ヨコナテ、ケズリ	橙	にぶい黄橙	0.5~1.0mmの砂粒を含む	良	153		
101	鍋取手(土師器)	SD01	P11	最大長:9.2 最大幅:6.5 最大厚:2.5		指調整		浅黄橙	0.5mm前後の砂粒、海綿骨片含む	良	41		
102	瓶(土師器)	SD01	上層	口径:37.2	ヨコナテ、カキメ	ヨコナテ、カキメ	浅黄橙	浅黄橙	微砂粒、1.0mmの砂粒、2.0~2.5mmの礫含む	やや不良	6		
103	甕(土師器)	SD01	Pit	口径:20.6	ケズリ、ナデ、ハケ	ヨコナテ、カキメ、ケズリ	黄橙	浅黄橙、黄橙	1mm前後の砂粒、海面骨片、赤色粒を含む	良	12		
104	高台椀(土師器)	SD05	上層	口径:20.0 器高:5.9 底径:8.7	ミガキ	ミガキ、ヨコナテ、回転糸切り	橙	橙	0.5mm前後の砂粒、赤色粒を含む	良	37		
105	椀(土師器)	SD05	上層	口径:15.0 器高:4.9 底径:7.7	不明	不明	浅黄橙	浅黄橙	0.5~1.0mm大の砂粒を含む	良	40		
106	内黒椀(土師器)	SD05	上層	底径:7.2	ミガキ	ヨコナテ、回転糸切り	黒	浅黄橙	0.5mm以下の砂粒を含む	良	39		
107	内黒椀(土師器)	SD05	上層	底径:6.3	ヘラミガキ	ヨコナテ、回転糸切り	黒	浅黄橙	0.5mm前後の砂粒を含む	良	38	内面剥離	
108	鍋取手(土師器)	SD05	上層	最大長:8.4 最大幅:6.1 最大厚:2.2		指ナテ調整		浅黄橙	0.5mm前後の砂粒、赤色粒を含む	良	42		
109	蓋(須恵器)	SD101		つまみ径:2.4	ナデ	ナデ、ケズリ後ナデ	灰	灰	1mm前後の砂粒を多く含む	良	122		
110	坏(須恵器)	SD101	上面	口径:13.6 器高:2.5 底径:7.6	ヨコナテ、ナデ	ヨコナテ、ナデ	灰	灰	1mm前後の砂粒を含む	良	121		
111	？(土師器)	SD101		最大長:5.3 最大幅:4.9 最大厚:1.8 重量:48.8g				浅黄橙	浅黄橙	1mm前後の砂粒を含む	良	171	

報告番号	器種	遺構	出土位置	法量(cm)	調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	胎土	状態	実測番号	備考
112	内黒輪(土師器)	SD103		底径:7.6	内黒、ミガキ	ケズリ、回転糸切り	黒色	にぶい黄橙	1mm前後の砂粒、海面骨片を含む	良	168	外面黒斑あり
113	高台皿(土師器)	P1		口径:14.0 器高:3.0 底径:7.4	ヨコナデか?	ヨコナデか?	浅黄橙	浅黄橙	微砂粒やや多く含む	並	107	摩耗著しい
114	碗(土師器)	P13		口径:13.6 器高:4.1 底径:6.3	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、回転糸切り	橙	橙	微砂粒、海面骨片含む	良	106	
115	蓋(須恵器)	P19		口径:16.2	ヨコナデ	ヘラ切り、ヨコナデ	灰白	灰白	海綿骨片、雲母少量含む、1mm以下の石英、長石粒多量に含む	並	113	
116	瓶(土師器)	P27			ヨコナデ	ケズリ、ナデ	黄橙	黄橙	微砂粒多く含む、海面骨片含む	並	108	内面下部に突起
117	坏(須恵器)	P39		口径:10.8 器高:3.0 底径:6.6	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラ切り後	灰	灰	1mm以下の石英、長石粒含む	良	86	
118	坏(須恵器)	P35		口径:12.6 器高:2.0 底径:7.0	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ヘラ切り	灰	灰	1mm前後の砂粒を含む	良	89	
119	坏(須恵器)	P44		口径:13.7 器高:2.9 底径:7.8	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラ切り	灰、赤灰	赤灰、赤	微砂粒を少量含む	良	105	口縁部にゆがみあり
120	高台皿(土師器)	P76		口径:13.4 器高:3.2 底径:7.1	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ケズリ、ヘラ切り	橙	橙	微砂粒、海面骨片含む	やや良	111	坏部にゆがみ
121	双耳瓶(須恵器)	P86		口径:13.8	ヨコナデ	ヨコナデ	灰	灰	1mm前後の砂粒含む	良	112	自然釉
122	双耳瓶(須恵器)	P86			ヨコナデ	ヨコナデ	灰	灰	1mm以下の白色粒含む	良	167	外面降灰
123	蓋(須恵器)	P86		口径:37.4	ヨコナデ、ナデ、同心肉当具	ヨコナデ、平行タタキ	灰	灰	1mm以下の白色粒含む	良	166	
124	内黒高台碗(土師器)	P86		口径:19.9 器高:6.1 底径:9.0	横位のミガキ、内黒	摩耗の為不明	黒	黒	1mm以下の砂粒多量に含む	良	114	
125	坏(須恵器)	P87		口径:14.3 器高:3.0 底径:7.8	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラ切り	灰	灰	0.5~1.0mmの砂粒を含む	整敷	157	
126	蓋(須恵器)	P88		口径:16.0	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラ切り	浅黄橙	浅黄橙	微砂粒、海面骨片を含む	並	159	黒斑?
127	蓋(須恵器)	P97		口径:15.4 器高:1.6	ヨコナデ	ケズリ、ヨコナデ	灰	灰	微砂粒を含む	良	110	
128	内黒輪(土師器)	P97		口径:13.8 器高:4.3 底径:7.2	ミガキ	ヨコナデ、回転糸切り	黒色	橙	微砂粒を含む	並	109	
129	脚(土師器)	P89					にぶい黄橙	海面骨片、微砂粒を少し含む	良	161	整形痕残す	
130	脚(土師器)	P89		最大長:4.7 最大幅:2.3 最大厚:1.1				浅黄橙	海面骨片、微砂粒を少し含む	良	161	整形痕残す
131	鉢(須恵器)	P 125		口径:30.0	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄	1mm前後の砂粒を多く含む	良	170	外面降灰
132	内黒輪(土師器)	P114		底径:5.8	ミガキ、ナデ	ケズリ後ナデ、回転糸切り	黒	橙	1mm前後の砂粒、雲母、海面骨片含む	良	124	見込みに環状剥離痕
133	内黒輪(土師器)	P 125 P 111 P 129		口径:12.0 器高:4.4 底径:6.2	ヨコナデ後ミガキ	ヨコナデ、ケズリ後ナデ、糸切り	黒	にぶい橙	1mm前後の砂粒、雲母含む	良	123	
134	瓦塔	SK01	上面・上層	最大長:13.1 最大幅:11.1 最大厚:1.5			灰白	灰白	長石含む	良	61	
135	瓦塔	堆積土		最大長:12.5 最大幅:6.9 最大厚:1.6			灰白	灰白	長石含む	良	60	
136	瓦塔?			最大長:4.6 最大幅:4.6 最大厚:2.0			灰白	灰白	長石細粒含む	良	164	屋根頂部?
137	蓋(須恵器)	堆積土	南より35m付近	口径:12.4 器高:2.7 つまみ径:2.0	ヨコナデ	ヨコナデ、ケズリ	灰	灰	微砂粒含む	良	93	
138	蓋(須恵器)	表採		口径:12.2	ヨコナデ	ヘラ切り、ヨコナデ	灰	灰	0.5~1.0mmの砂粒を含む	良	88	

報告番号	器種	遺構	出土位置	法量(cm)	調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	胎土	焼成	実測番号	備考
139	蓋(須恵器)	堆積土	調査南 調査区南	口径:14.0	ヨコナテ	ケズリ、ヨコナテ	にぶい赤橙、褐灰	にぶい赤橙、褐灰	1.0mmの砂粒、海綿骨片含む	不良	95	
140	蓋(須恵器)	表探等		口径:17.0	ヨコナテ	ケズリ、ヨコナテ	灰	灰	0.5mm前後の砂粒含む	良	133	
141	蓋(須恵器)	堆積土	最下段より30m付近	口径:14.4	ヨコナテ	ケズリ、ヨコナテ	灰白	灰白	0.5mm前後の砂粒含む	良	154	
142	高台坏(須恵器)	表探等		底径:10.1	ヨコナテ	ヨコナテ	灰	灰	0.5mm前後の砂粒含む	良	135	内面剥離
143	坏(須恵器)	表探		口径:13.4 器高:2.2 底径:9.4	ヨコナテ	ヨコナテ、ヘラ切り	灰	灰	微砂粒含む	良	148	
144	坏(須恵器)	表探		口径:13.5	ヨコナテ	ヨコナテ	灰白	灰白	微砂粒、1.0mmの砂粒含む	並	150	
145	坏(須恵器)	表探		口径:13.6	ヨコナテ	ヨコナテ	灰	灰	砂粒含む	良	149	
146	坏(須恵器)	表探		口径:13.2	ヨコナテ	ヨコナテ	灰	灰	微砂粒を含む	良	147	
147	坏(須恵器)	落ち込み101		口径:13.4	ヨコナテ	ヨコナテ	褐灰	褐灰～にぶい褐	0.5mm以下の細砂粒多量に含む	やや不良	143	
148	坏(須恵器)	表探等		口径:13.6	ヨコナテ	ヨコナテ	灰	灰	0.5mm以下の白色粒含む	良	138	
149	坏(須恵器)	堆積土	最下段より30m付近	口径:14.4 器高:2.2 底径:7.6	ヨコナテ	ヨコナテ、糸切り、ヘラ切り	灰白	灰白	微砂粒やや多く含む	並	99	非常に薄い
150	坏(須恵器)	落ち込み101		底径:7.9	ヨコナテ	ヨコナテ、ヘラ切り	灰	灰	0.5mm以下の細砂粒含む	良	129	
151	瓶(須恵器)	包含層		底径:8.0	ヨコナテ	ヨコナテ、回転糸切り	灰	灰	1mm以下の石英、長石粒大量に含む	良	116	
152	坏(須恵器)	包含層		底径:6.7	ヨコナテ	ヨコナテ、ヘラ切り	オリブ灰	暗青灰	1mm以下の白色粒多量に含む	並	173	
153	長頸壺(須恵器)			底径:9.8	ヨコナテ	ヨコナテ	灰	灰	0.5～1.0mmの砂粒含む	良	87	
154	小甕(須恵器)	堆積土	最下段より30m付近	口径:9.0	ヨコナテ	ヨコナテ	灰	灰	微砂粒やや多く含む	良	92	
155	瓶(須恵器)	表探			ヨコナテ	ヨコナテ	灰	灰	1.5mm前後の砂粒を含む	良	90	
156	双耳瓶(須恵器)	農道前分	地上		ヨコナテ	カキメ、ナテ、ヨコナテ	灰	灰	1mm以下の石英、長石粒含む	良	128	
157	双耳瓶(須恵器)	堆積土	南より25m地下最下段		ヨコナテ	ヨコナテ	灰	灰	微砂粒、1.5～2.0mmの礫含む	良	94	降置
158	壺(須恵器)	落ち込み101		口径:13.2	ヨコナテ	ヨコナテ	黒褐	黒灰	1mm以下の白色粒含む	良	130	
159	鉢(須恵器)	表探等		口径:19.2	ヨコナテ	ヨコナテ、ケズリ	灰	灰	0.5～1.0mmの砂粒含む	良	137	
160	壺(須恵器)	表探等			ヨコナテ	ヨコナテ、ケズリ	灰	灰	0.5mm前後の砂粒含む	良	134	
161	坏(須恵器)	堆積土	南より25m付近	口径:15.0	ヨコナテ	ヨコナテ	灰白	灰白	微砂粒やや多く含む	良	91	
162	内黒碗(土師器)	堆積土		口径:13.6 器高:3.9 底径:5.8	ミガキ	ヨコナテ、ケズリ、回転糸切り	にぶい黄橙	にぶい黄橙、黒色	1mm前後の砂粒を含む	良	140	
163	小甕(土師器)	攪乱		口径:12.2	ヨコナテ、ケズリ後ナテ	ヨコナテ	浅黄橙	浅黄橙	1mm前後の砂粒、海面骨片を含む	良	136	
164	碗(土師器)	堆積土	調査南 調査区南	口径:17.0	ヨコナテ	ヨコナテ	浅黄橙	浅黄橙	1mm前後の砂粒を多く含む、海面骨片含む	良	162	一部黒斑

報告番号	器種	遺構	出土位置	法量(cm)	調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	胎土	状態	実測番号	備考
165	鉢 (土師器)	堆積土		口径:22.4	ヨコナテ、ケズリ後ナテ	ヨコナテ	浅黄橙	橙	1.5mm前後の砂粒を含む	良	118	
166	小椀 (土師器)	堆積土	最下段 南より付 30m近	口径:7.2	指ナテ、ナテ	ナテ、指頭 圧痕	橙	橙	1mm前後の砂粒を含む	良	11	手ずくね
167	小壺 (土師器)	表採		底径:4.8	ナテ	ナテ、ケズ リ後ナテ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	1mm前後の砂粒を含む	良	160	
168	杯 (土師器)	表採等		Li径:8.0 器高: 3.15 底径:3.8	ヨコナテ	ヨコナテ、 回転糸切り	浅黄橙	浅黄橙	0.5mm以下の砂粒を含む	良	132	
169	底部 (土師器)	表採		底径:4.8	ヨコナテ	ヨコナテ、 回転糸切り	橙	橙	微砂粒含む	良	144	
170	小椀 (土師器)	堆積土	最下段 南より付 30m近	口径:9.2 器高: 3.3 底径:5.4	ナテ	ナテ、回転 糸切り	にぶい 橙	にぶい 黄橙	1mm前後の砂粒を含む	良	117	外面摩耗
171	擂鉢	表採等		底径:13.7	ヨコナテ	ヨコナテ	灰	灰	1mm前後の砂粒、 0.5~1cm大の磯 海綿骨片含む	良	131	おろし 目は 6条上、内 面 摩耗
172	不明	SK101		最大長:9.6 最大幅:7.2 最大厚:2.7				橙	雲母や白色の微 粒砂含む	良	石-5	
173		落ち込 み101		最大長:5.4 最大幅:4.5 最大厚:1.5			にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	1mm以下の石英、 長石粒、焼土塊 含む	並	石-9	断面:暗 灰色
174	取っ手	表採		最大長:6.0 最大幅:5.0 最大厚:1.8 重量:44.4g			赤灰	赤灰	長石粒など含む		石-7	
175	はずみ 車?	P129		最大長:4.3 最大幅:3.6 最大厚:3.4 重量:58.7g			黄褐	黄褐	長石等含む		石-6	
176				最大長:13.9 最大幅:10.2 最大厚:8.0 重量:785.9g							石-10	融着
177	砥石	表土層		最大長:3.7 最大幅:2.6 最大厚:2.1 重量:38.4g							石-2	
178	台石	P93		最大長:13.1 最大幅:13.4 最大厚:8.1 重量:1710g							石-3	被熱
179	砥石	SK20		最大長:9.0 最大幅:5.4 最大厚:4.3 重量:287.4g							石-1	
180	台石	P65		最大長:10.4 最大幅:9.8 最大厚:3.3							石-4	被熱

第4章 総括

本調査は、調査から報告まで15年以上の間隔があるために、失われてしまった情報があまりにも多いことが、作成作業を通じて実感した。それは、報告者である私の調査の記憶ばかりでなく、メモ等の記録資料の整理や移動に伴って少しずつ散逸したことや、写真を見てもその撮影意図を正確に理解できないコマもまた存在したのである。流れ作業のようにおこなっていた調査であったと反省している。

营造時期

本調査区から出土した土器は、正確な個体数の統計をとっていないが、半数以上が土師器で占められているようで、古代須恵器生産の終焉時期に相当し、また瀬戸窯跡群全体の中でも最終末に位置づけられる。須恵器で器壁の薄い杯や無鈕扁平な杯蓋を主体とする特徴は、給分小袋窯から倉垣コマクラベ窯の時期でも後者を主体とする段階に相当することを示す。これらの時期は、吉岡康暢氏によってⅣ2～Ⅴ1期に設定された時期である¹⁾。また、川畑誠氏によって能登地域の須恵器窯終焉の研究作業で、Ⅵ1～Ⅵ3期と設定された時期である²⁾。暦年代では、吉岡氏の論文によって10世紀前葉から中葉が与えられている。

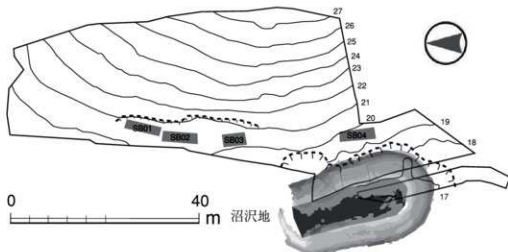
いっぽうで、瓦塔の存在(134・135)や鉄鉢写しの器形(159)、壺蓋(88)からその時期が単一ではなくて幅を持っていることを示す。瓦塔は能登国分寺跡から多く出土しており、おおむね9世紀後半代の年代が与えられているので、瀬戸窯跡群や花見月遺跡A地区³⁾から出土した瓦塔の年代をそこまで引き上げることもできよう。したがって、遺構が営まれた時期は、9世紀後半から10世紀代と推測したい。

作業ユニット

さて、この調査は瀬戸窯跡群を目的とした調査であったにもかかわらず、窯体本体の調査はなく、その周辺遺構の調査となった。もっとも周知の遺跡である瀬戸窯跡群の中を工事区域が縦断することから、それにかかる窯体や灰原の調査を期待したのである。平成元年度は窯跡を掘る予定で窯跡群という遺跡の名称を用いたものの検出されず、平成2年度にそれから外れるということで瀬戸遺跡という名前で調査したものの、本来窯跡とそれに付随する施設を一帯としてとらえれば、瀬戸窯跡群という遺跡名でよかったのであろう。

この付随する施設の具体的内容を明確にできたかという、必ずしもそうではない。船着場となる可能性のある落ち込みの検出、施設を区画する溝の存在、不整形の土坑と内部にある須恵器と土師器、および小屋掛けのような建物の存在が最大限指摘できる。地勢から窯業生産活動に船着場の存在は必須であり、窯跡に簡単な作業場を付帯して存在していることを示すことができた。つまり、窯場と工人たちの生活の本拠は異なるのであろう。窯と付随する施設のセットという形態が、古代の土器生産の一般的形態と演繹できよう。

この作業場の内容把握は困難である。前述の通り、発掘ミスもあって正確な建物の復原は困難なのである。しかしながら、SD05に接してあるP50・51・102・101から3間×1間の建物があり、3m西で船着場の溝群になることを考えれば、そして西側の柱穴が概して浅いことから、西側がオープンになっている小屋掛け構造の建物の可能性を推測できよう。



第26図 調査区検出遺構概念図

したがって、恒常的に居住するためのものではなく、一時的に必要な時だけ使われる機能であったと推測できる。実際、柱穴と思われる小穴を掘削すれば遺物が出土することが間々ある。建物の建て替えと抜き取りに遺物が混入することもあるであろう、このような所作によって地形のくぼみのみならず柱穴にまで遺物が入り込むであろう。

さらに、土坑の存在も注意すべきである。掘り直しが土層から観察されるように、穴の空間が重要なのであった。しかも建物の存在とは必ずしも有機的な関連を持っていないと考えられるのは、それからはなれて存在したり重複していることから、おおよそ類推される場所である。可能性として、窯体補修や土器を作るための粘土をとる目的として土坑が掘られたのであろう。SD05周辺をモデルとして捉えるならば、区画溝、掘立小屋、土坑というセットが完結した構造体と認識され、その複合状態がより北に展開する、すなわちSD01等の遺構群と考えられよう。このような視点で遺跡を眺めれば、建物を中心とした遺構のまとまり（これを作業ユニットとして仮に称する）を抽出することができよう。

このような作業ユニットを4箇所確認したことになる。遺構の重複がないので同時存在も可能である。しかし、これ以外に柱穴となる可能性の高い小穴も存在することから、複数の時期の作業ユニットが存在したと推測し、報告で復原した建物はその最終形を示しているといえよう。

遺跡の性格

花見月遺跡は窯跡群に近接する平坦地に営まれた集落遺跡で、具体的な建物遺構の検出はなかったが、B地区から壁の焼けた土坑とその前面に炭・灰の詰まった小穴がある。土師器焼成窯の可能性もあり、窯場周辺における多様な土地利用をうかがうことができる。このようなわずかな平坦地を利用して、粘土を採取してそれをこねて、ロクロを回して形を作り、窯で焼いた後に搬出する、このような作業をおこなう場所として機能したのであろう。土師器も須恵器とともに生産していたと思われ、花見月遺跡B地区のようにその窯場も近在する場合も想定される。このような場が山丘に散在する窯に隣接するように点在することが予想される。

このような作業形態が古代土器生産の一般的な姿を示すと考えるには慎重にならなければならない。それは、粘土採掘場所とその加工場所さらに焼成場所が同じであることの利点があるから多様な作業

場所が作られたと思われるからである。これら一連の作業が同じ場所ですることが効率よいからであり、それら作業にかかる人あるいは物資の移動が最小限にすむと思われる。

第2章でも述べたとおり、伊久留川流域は低湿な地勢にあり、居住に適した地が限られていた。土器を生産するのに、大量の粘土や資材が必要であり、焼成前の土器を風雨から守るための場所も必要となる。これらの場所がそれぞれ遠く離れていれば、それらを移動させるために多大の労力が必要となるであろうし、土器が破損したりあるいは物資が滅失するなどの危険が生じる。その危険を最大に減じる方法が、このような作業形態となったと思われる。

それでは、伊久留川流域の土器生産が邑間低地帯に面する春木窯跡群などから遅れてはじまり、主要な時期が9世紀後半以降を主とするのであろうか。一般的には、主要な窯跡群の須恵器生産衰退に伴う「窯の拡散化現象」として認識されている。瀬戸窯跡群は、鳥屋窯跡群の一角に存在するが、その主要な時期には花見月窯跡群、池崎窯跡群など同じ地勢にあり、鳥屋窯跡群との親縁性よりも後者により緊密な関係が予想される。鳥屋窯跡群の資料が採集資料を中心としているので、その詳細な分析による研究の深化が望まれる。

注

- 1 吉岡康暢「奈良平安時代の土器編年」『東大寺領横江庄遺跡』松任市教育委員会・石川考古学研究会1983年
- 2 川畑誠「能登地域の須恵器生産の終焉」『北陸古代土器研究』第2号北陸古代土器研究会1992年
- 3 石川県立埋蔵文化財センター「花見月遺跡」1984年



航空写真
南から七尾湾望む



航空写真 西から全景



航空写真 北から全景



航空写真 南から全景



航空写真 垂直写真①



航空写真 垂直写真②



航空写真 垂直写真③



航空写真 垂直写真④



航空写真 垂直写真⑤



第2調査区 北から全景



遺構集中部分



遺構集中部分 (拡大)



遺構集中部分



遺構集中部分



谷への傾斜



落込101



落込101



谷への傾斜



SK27とSD01



SD01とSK27



SK27 断面



SK27 遺物出土状況



SK27 白色粘土出土状況



SK27 焼土出土状況



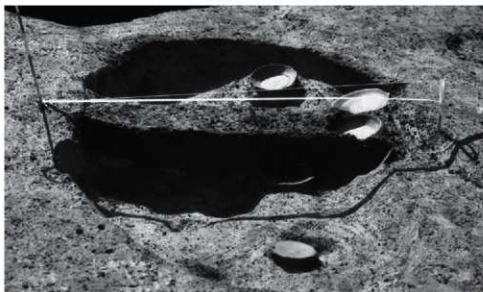
SK02



SK04 (右)・17 (左)



SK17



SK17断面



SK20



SK26・ビット74



SK11



SK12



SK07



ビット1



ビット1 検出と断面



ビット3 断面



ビット5 断面



ビット8 断面



ビット9 断面



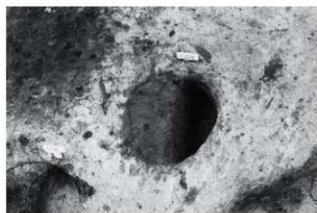
ビット13 断面



ビット13



ピット17



ピット18



ピット19断面と遺物状況



ピット20



ピット22・23



ピット20



ピット31



ビット43・53



ビット46



ビット50



ビット51



ビット71



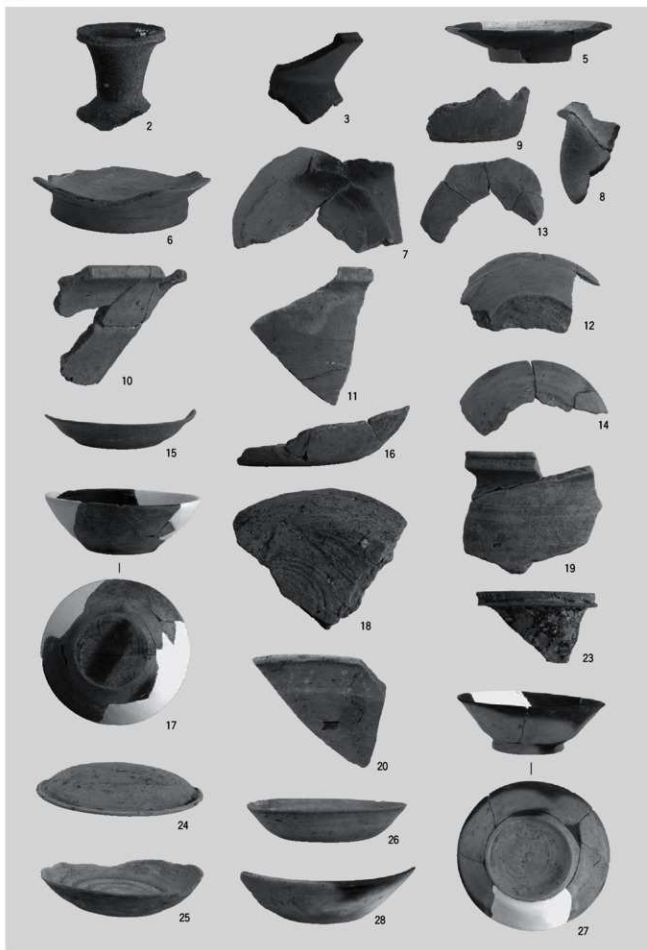
ビット114

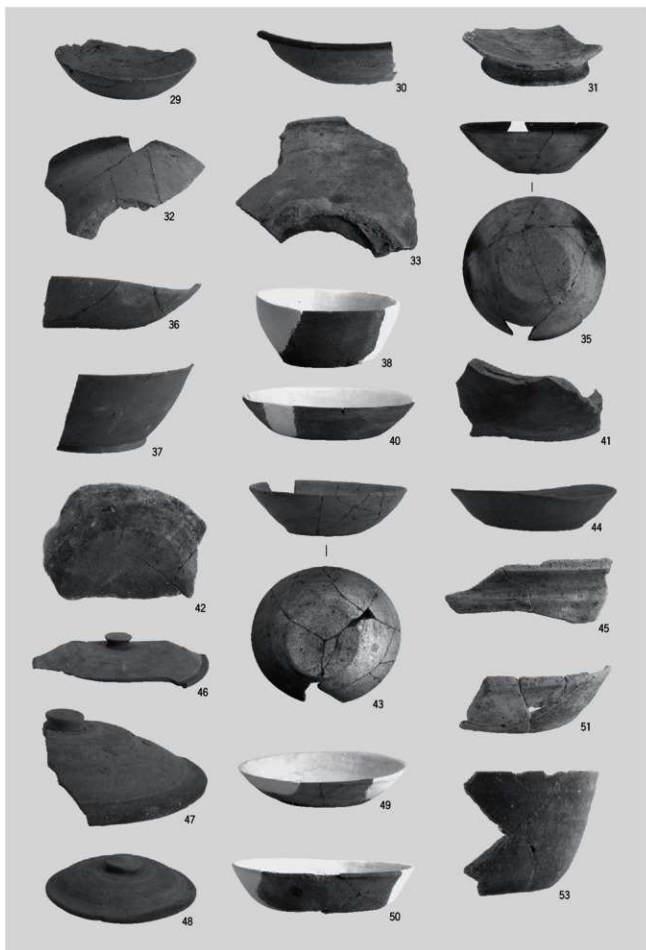


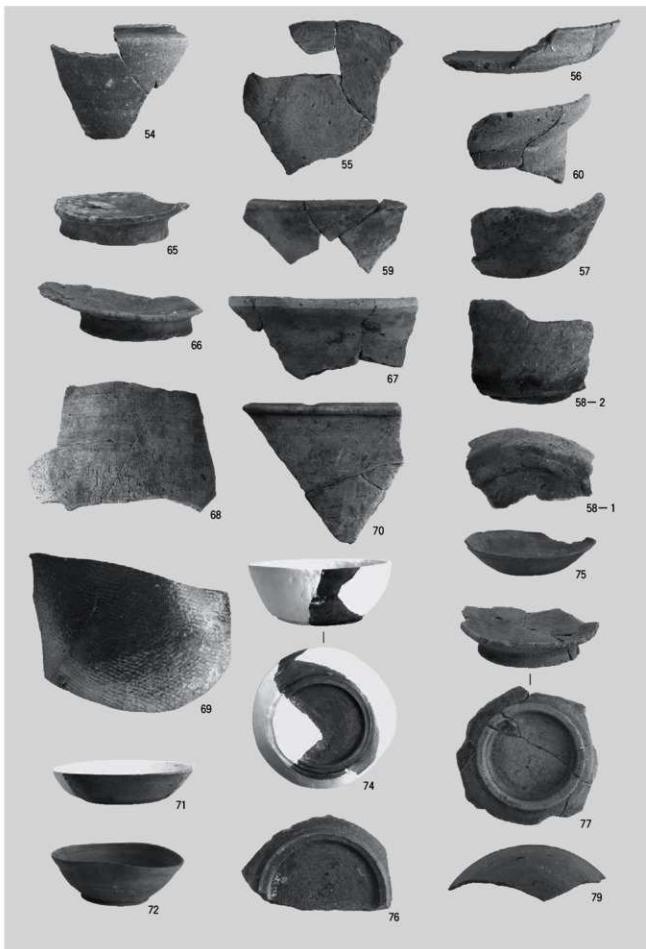
ビット108・109

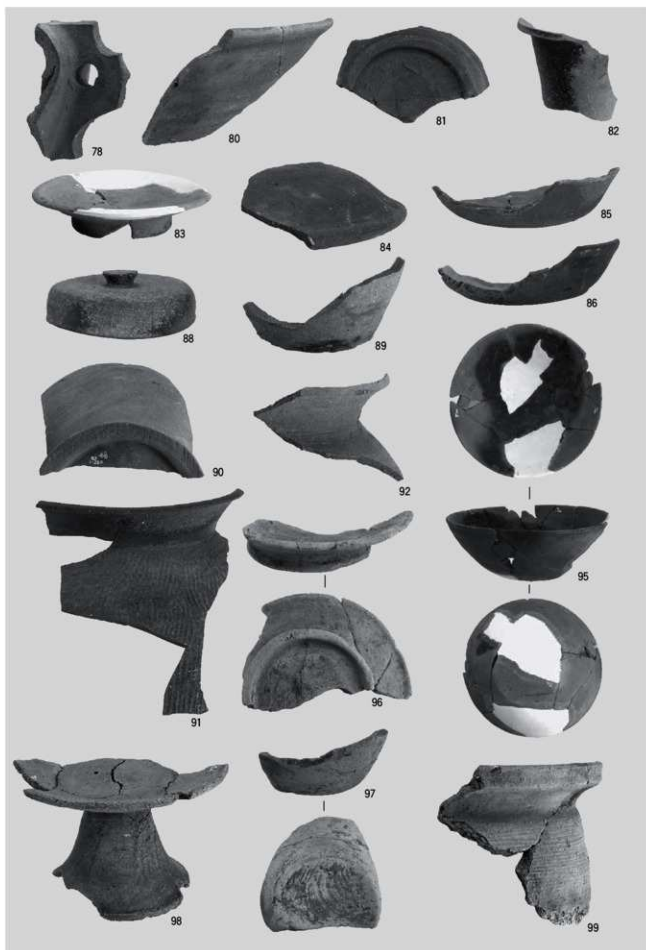


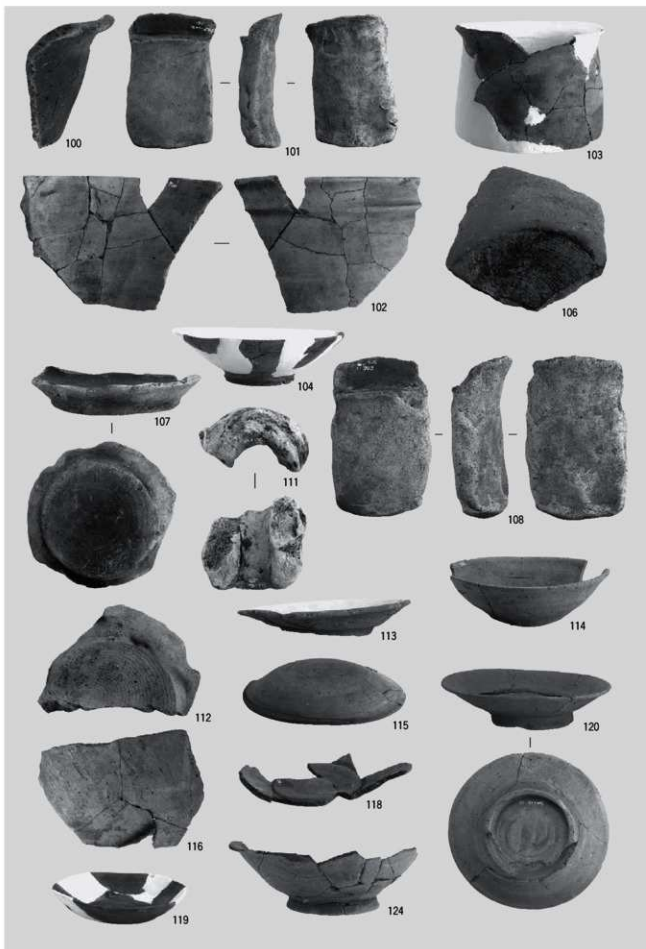
ビット76

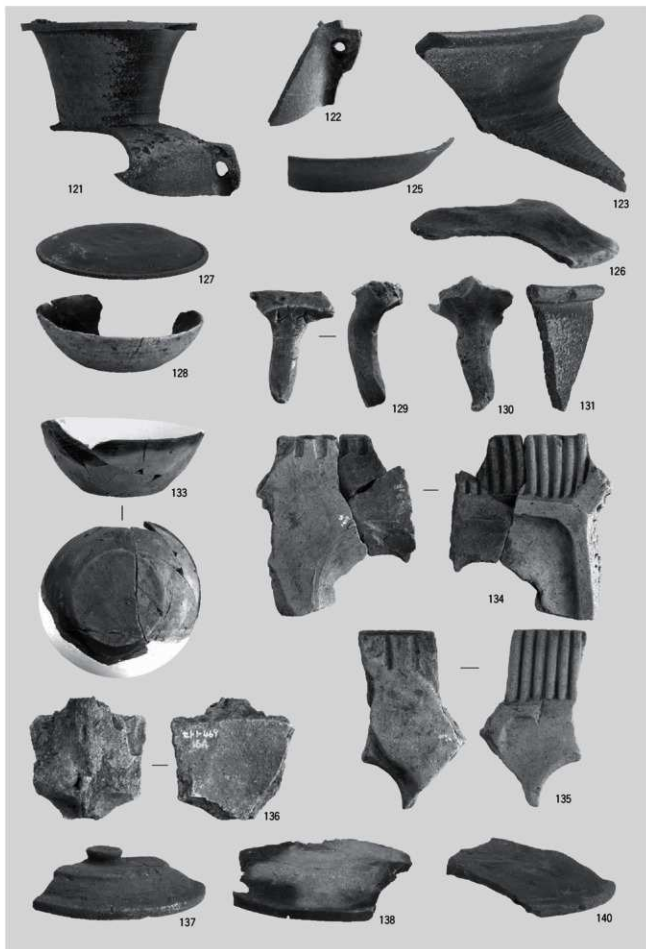


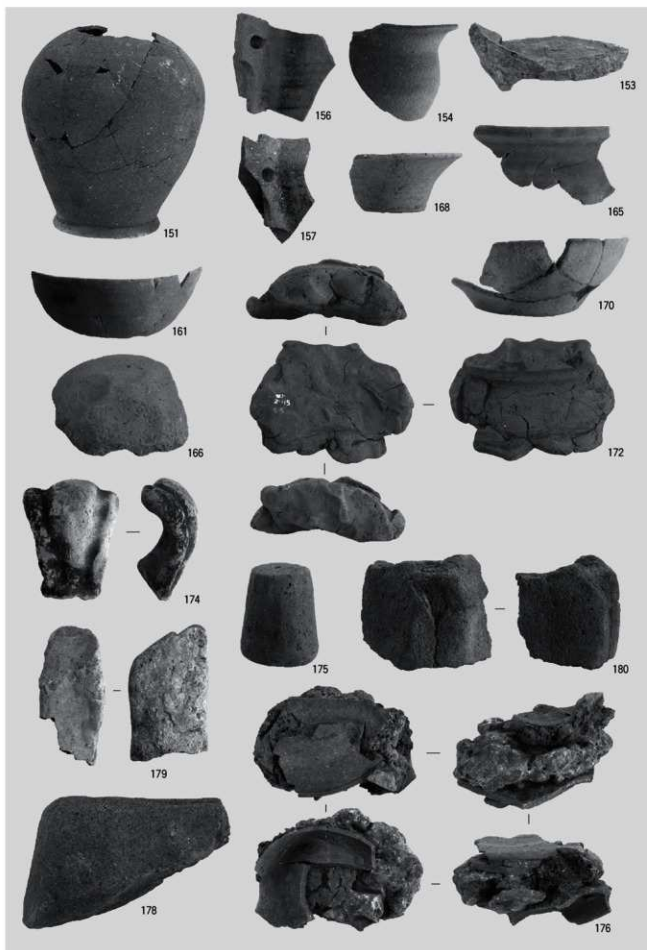












報告書抄録

ふりがな	なかのとまち せとようせきぐん・せといせき							
書名	中能登町 瀬戸窯跡群・瀬戸遺跡							
副書名	県単道路改良事業一般県道良川磯辺線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	伊藤雅文							
編集機関	財団法人石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 TEL (076) 229-4477							
発行機関	石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	2009年3月31日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 (新)	東経 (新)	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
瀬戸窯跡群	石川県 中能登町 瀬戸地内	17407	32070	37度 0分 26秒	136度 52分 58秒	19890807 ～ 19891117 19900829 ～ 19901031	4,100㎡	主要地方道 志賀田鶴浜 線改良工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
瀬戸窯跡群 瀬戸遺跡	窯跡	平安時代	建物跡、土坑、溝		須恵器、土師器、 瓦塔		10世紀前半の須 恵器窯跡群に附 属する作業場跡 の調査	
要約	9世紀から10世紀の須恵器窯跡群である瀬戸窯跡群の一角にある、生産にかかわる作業場跡を調査した。小屋掛けのような簡易な建物を4棟とそれに伴う区画溝、建物背後の土坑などがある。純度の高い粘土の出土から陶器製作場所の可能性も考えられる。また、窯跡との位置関係から、窯詰や窯出しなどの諸作業にかかわる施設とも考えられる。							

中能登町 瀬戸窯跡群・瀬戸遺跡

発行日 平成21(2009)年3月31日

発行者 石川県教育委員会

〒920-8575 石川県金沢市鞍月1丁目1番地
電話 076-225-1842 (文化財課)

財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
電話 076-229-4477

E-mail mail@ishikawa-muibun.or.jp

印刷 株式会社 橋本唯文堂